

第4節 土坑

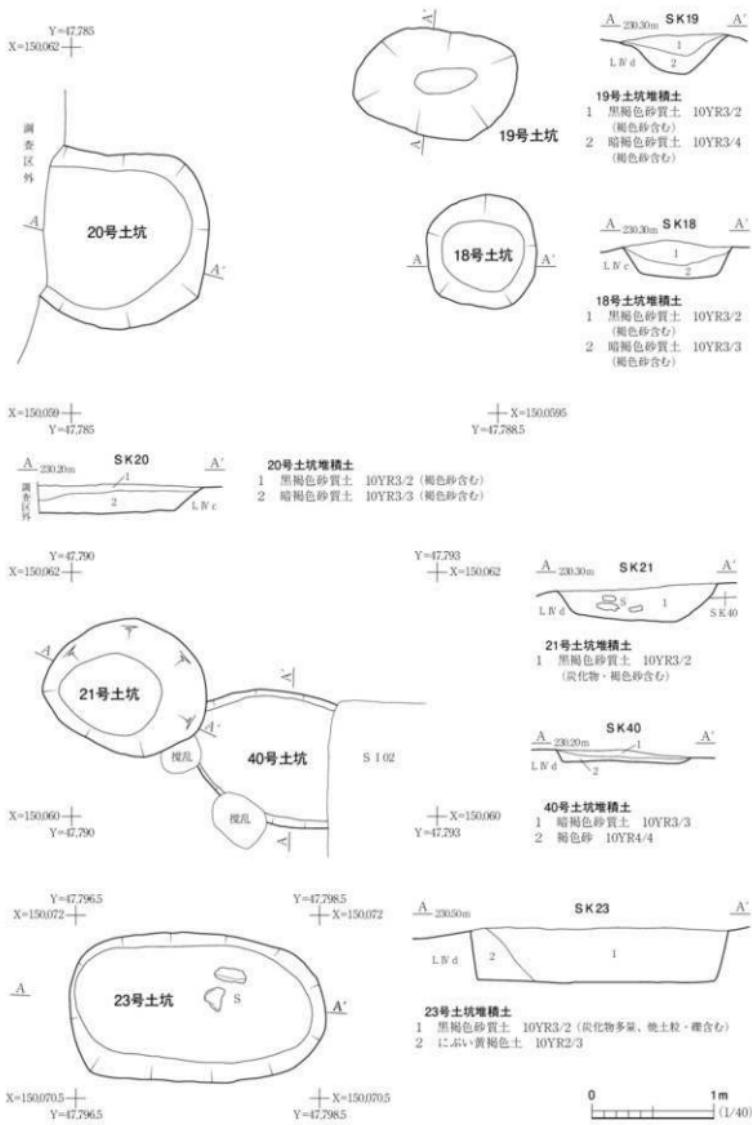


図28 18~21・23・40号土坑

通寶」(初鑄1107年)である。

24号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世を考えている。(吉野)

25号土坑 S K 25 (図30・42、写真25・50)

25号土坑は、調査区南部C 12グリッドの3号溝跡と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は不整形である。規模は長軸が128m、短軸が0.93m、深さは0.14mである。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で焼土粒を含んだ、人為堆積を考えている。

遺物は古銭1点が出土した。図42-11は北宋錢で、「治平元寶」(初鑄1064年)である。

25号土坑からは、古銭を埋納した行為が想定できる。時期は出土遺物から中世を考えている。

(吉野)

26号土坑 S K 26 (図29・42、写真26・50)

26号土坑は、調査区中央部のC 12グリッドL IV d上面で検出した。64号土坑と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸が1.57m、短軸が1.1m、深さは0.41mである。壁は二段構築で、底面は皿状に窪む。本土坑の北東隅には、平坦面を設け、礫を開続させ、古銭1枚を埋納していた。堆積土は3層に区分し、②・③に含まれる黄褐色・黒褐色土塊から、人為堆積である。

遺物は土師器1点、かわらけ7点、古銭1点が出土した。図42-13はかわらけで、ロクロ成形されたものである。底部外面に回転糸切り痕がみられる。図42-12は北宋錢で、「元符通寶」(初鑄1098年)である。

26号土坑は、古銭を埋納していることから、墓坑の可能性を考えている。時期は出土遺物から中世である。(吉野)

27号土坑 S K 27 (図30、写真25)

27号土坑は、調査区中央部のC 12グリッドL IV d上面で検出した。3号溝跡と64号土坑と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は隅丸方形である。規模は長軸が1.24m、短軸が1.08m、深さは0.33mである。壁は外傾し、底面は皿状に窪む。堆積土は1層で、骨や礫が多量に含まれていたので、人為堆積を考えている。

遺物は陶器2点、かわらけ4点、古銭2点、鉄滓2点、骨62点が出土した。骨はウマの上顎である(付章1)。

27号土坑は、ウマの上顎を埋納した土坑と考えている。時期は出土遺物から中世である。(吉野)

33号土坑 S K 33 (図31・42、写真26)

33号土坑は、調査区南部のB 14グリッドL IV c上面で検出した。小穴と重複し、新旧関係は

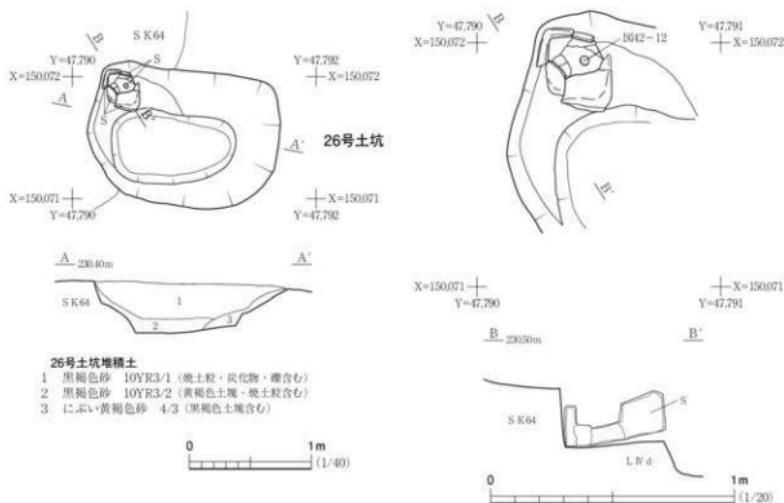


図29 26号土坑

本土坑が古いものと新しいものがある。平面形は不整方形である。規模は長軸が3.73m、短軸が2.86m、深さは0.15mである。壁は外傾し、底面は凹凸がみられる。堆積土は1層で、褐色砂を含むことから、自然堆積を考えている。

遺物は土師器27点、陶器1点、土壁5点が出土した。図42-14は陶器の信楽焼で、壺もしくは壺である。図42-15は土師器壺で、外面はハケメ、内面は横方向にナデ調整が施されている。

33号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

34号土坑 SK 34 (図31・42、写真26)

34号土坑は、調査区南部のB 14グリッドL IV c上面で検出した。小穴と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は西壁が調査区外にあるが、楕円形であろう。規模は現状で長軸が1.72m、短軸が1.65m、深さは0.13mである。壁は外傾し、底面は凹凸がみられる。堆積土は1層で、褐色砂を含むことから、自然堆積を考えている。遺物は陶器1点が出土した。図42-16は常滑焼の壺もしくは壺である。

34号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

39号土坑 SK 39 (図32・42、写真27)

39号土坑は、調査区南部のB 13グリッドL IV d上面で検出した。小穴と重複し、古いものや新しいものがある。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.35m、短軸が0.92m、深さは0.39mであ

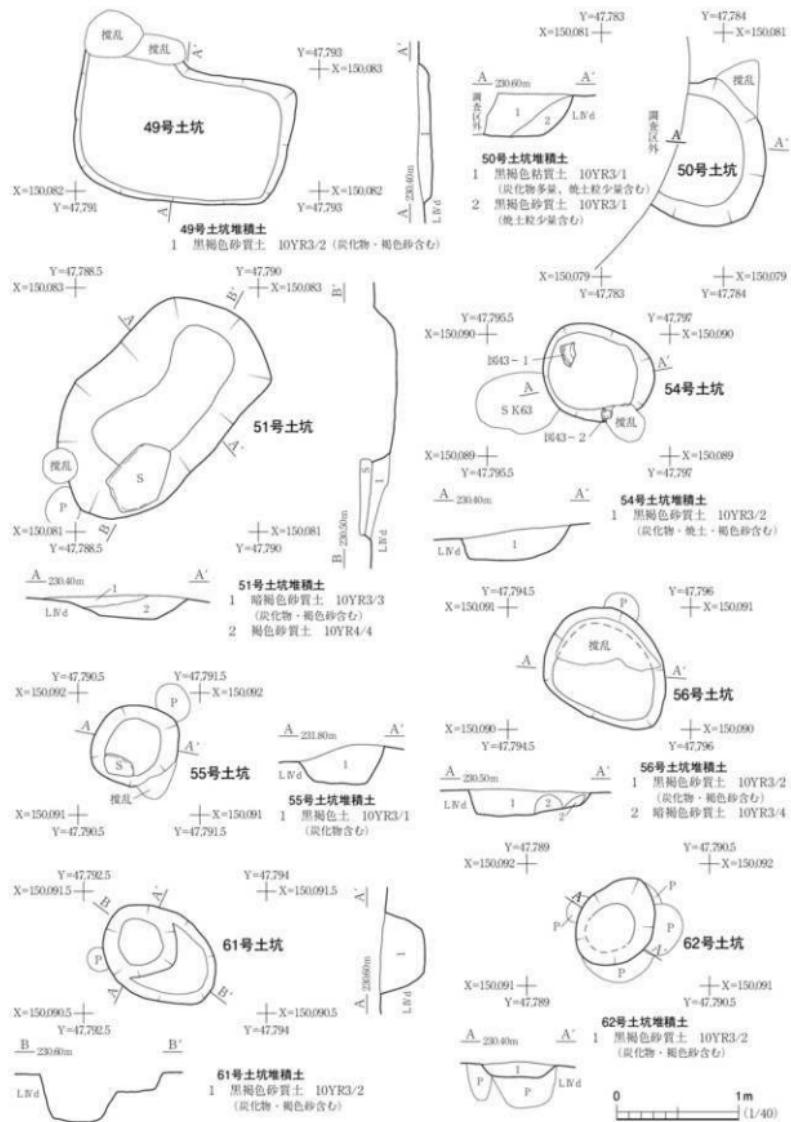


図33 49~51・54~56・61・62号土坑

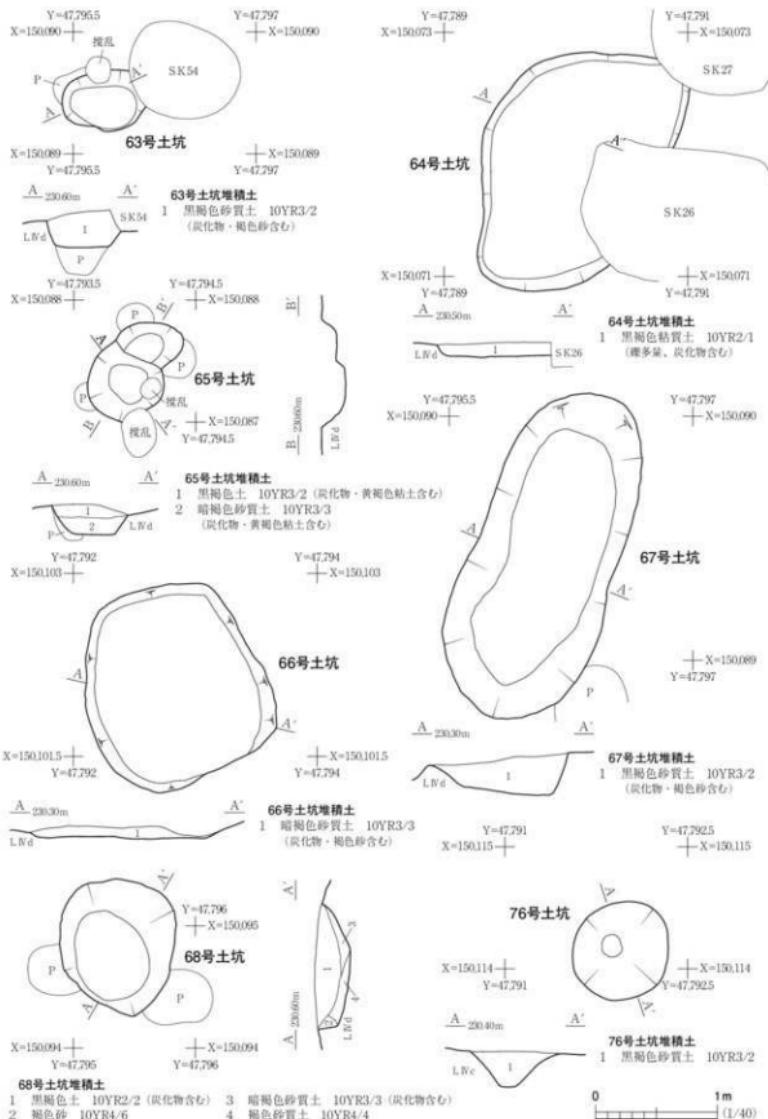


図34 63~68・76号土坑

1.33m、深さは0.35mである。壁はかなり外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に区分した。堆積土の大半には焼土・炭化物が含まれ、ℓ 1には土壁が多量に含まれていた。この状況から人為堆積を考えている。

遺物は土師器7点、陶器7点、かわらけ7点、土製品1点、古銭1点、土壁141点が出土した。図43-3～6は陶器である。3～5は古瀬戸で、3は平底末広椀、4は鉢し皿で口縁が折り返されている。5は花瓶の高台で、被熱を受けている。施釉は3・4が灰釉、5は外面が灰釉、花瓶内面が天目釉である。6は在地産の甕もしくは壺である。図43-7は羽口で、図43-8は北宋銭の「熙寧元寶」(初鑄1068年)である。72号土坑からは土壁(写真50)が多量出土しているので、火災に遭った建物の廃材を埋めた穴と考えている。時期は出土遺物から中世である。
(吉野)

73号土坑 SK 73 (図35・43、写真29)

73号土坑は、調査区中央部のC 9・10グリッドL IV d上面で検出した。72号土坑・小穴と重複し、新旧関係は72号土坑では古く、小穴では新しい。平面形は東壁が調査区外にあるものの、不整長方形と考えている。規模は長軸が現状で2.38m、短軸が1.55m、深さは0.43mである。壁は二段構築で、底面は皿状に窪む。堆積土は5層に区分した。堆積土の大半には焼土・炭化物が含まれ、ℓ 1には焼土が多量に含まれていた。この堆積状況から、人為堆積を考えている。

遺物は土師器5点、陶器1点、かわらけ4点、土壁31点が出土した。図43-9・10はかわらけで、ロクロ成形である。10は被熱を受け、底部外面には回転糸切り痕がみられる。図43-12は在地産の陶器で、鉢の底部である。図43-11は土師器甕の底部で、底部外面には砂粒が付着していた。土壁は1～5cm大の破片で、焼けてスサが含まれている。

73号土坑からは土壁が出土していることから、72号土坑と同様に、火災に遭った建物から出た廃材を埋めた穴と考えている。時期は出土遺物から中世である。
(吉野)

82号土坑 SK 82 (図37・43、写真30)

82号土坑は、調査区中央部のA・B 7グリッドL IV c上面で検出した。17号遺跡と重複し、本土坑が新しい。平面形は隅丸長方形で、一部をトレンチで欠損している。規模は長軸が現状で2.15m、短軸が1.51m、深さは0.28mである。壁は外傾し、底面は中央部が隆起している。堆積土は3層に区分した。ℓ 1に含まれる黄褐色粘土や炭化物から、人為堆積を考えている。

遺物は鉄製品2点が出土した。図43-13は鉄釘で、釘頭が屈曲している。図43-14は鎌である。断面形は13が方形で、14が円形である。

82号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

91号土坑 SK 91 (図38、写真31)

91号土坑は、調査区南東部のD 14グリッドL IV a上面で検出した。平面形は梢円形である。規



図30 25・27・30~32・38号土坑

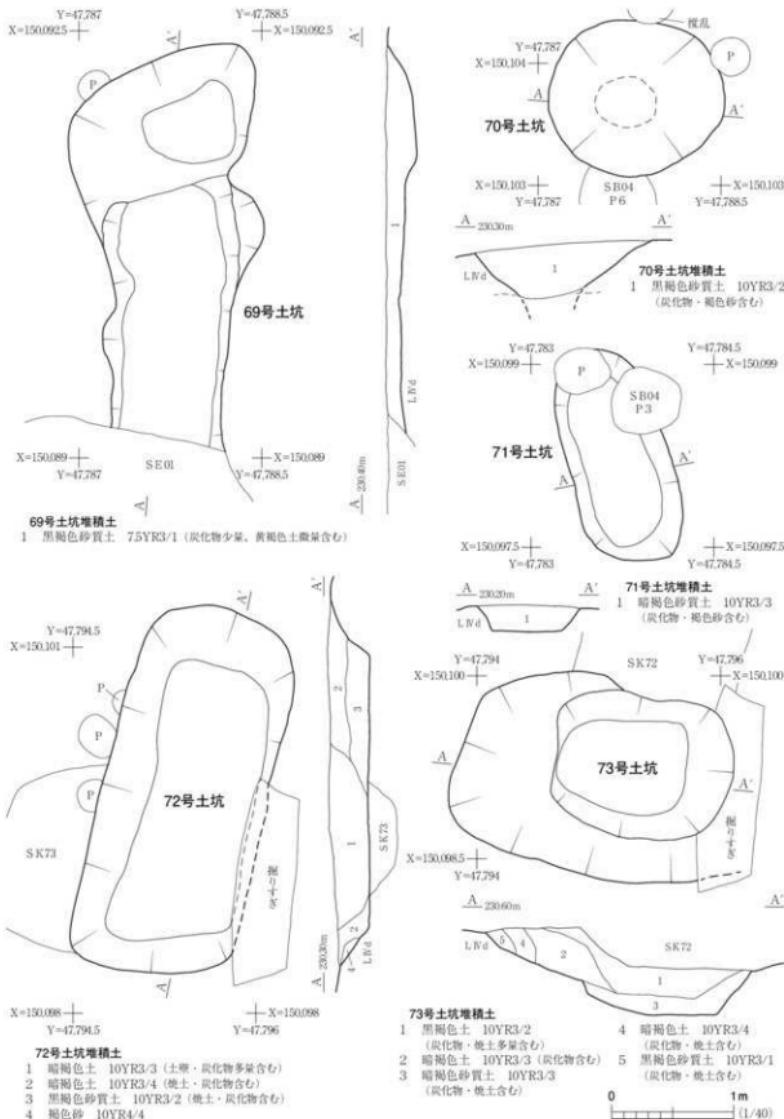


図35 69～73号土坑

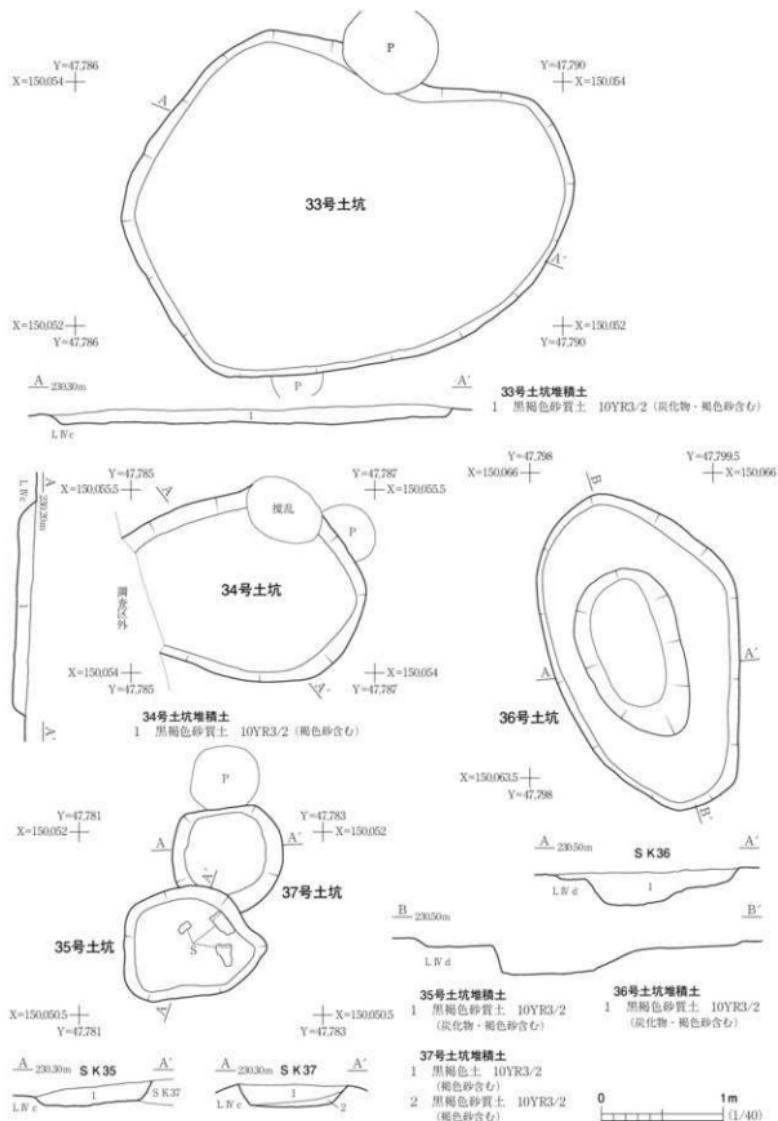


図31 33~37号土坑

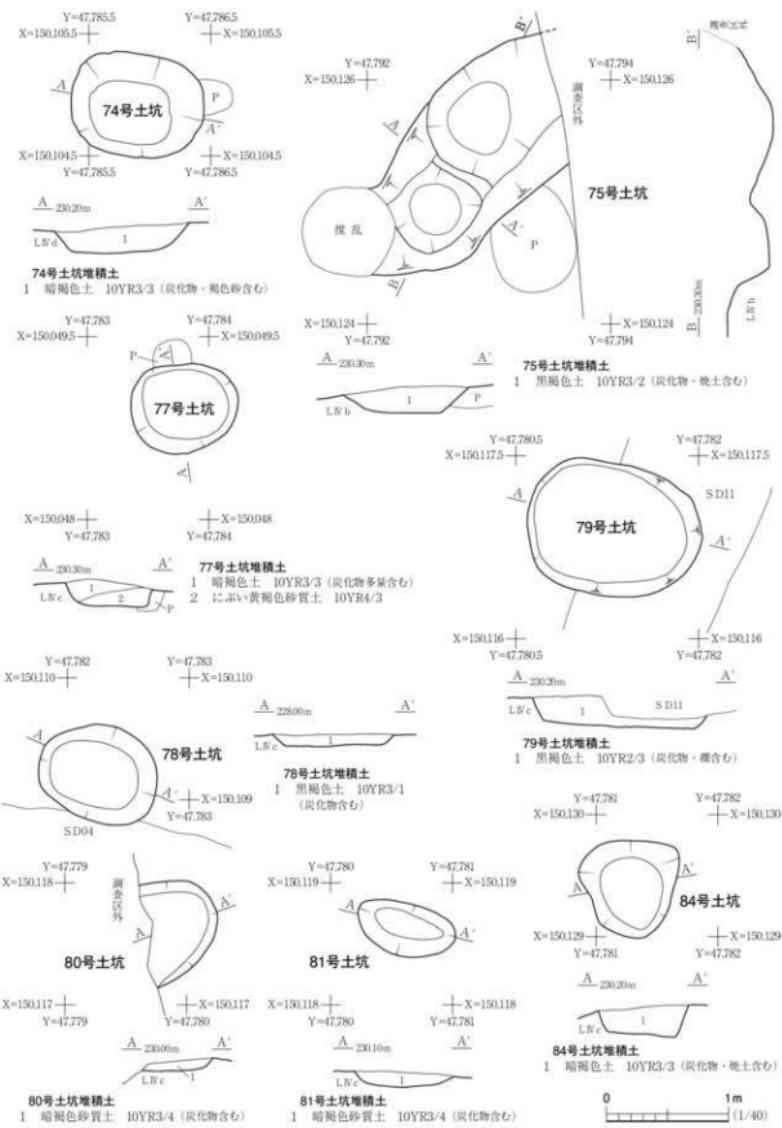


図36 74・75・77~81・84号土坑

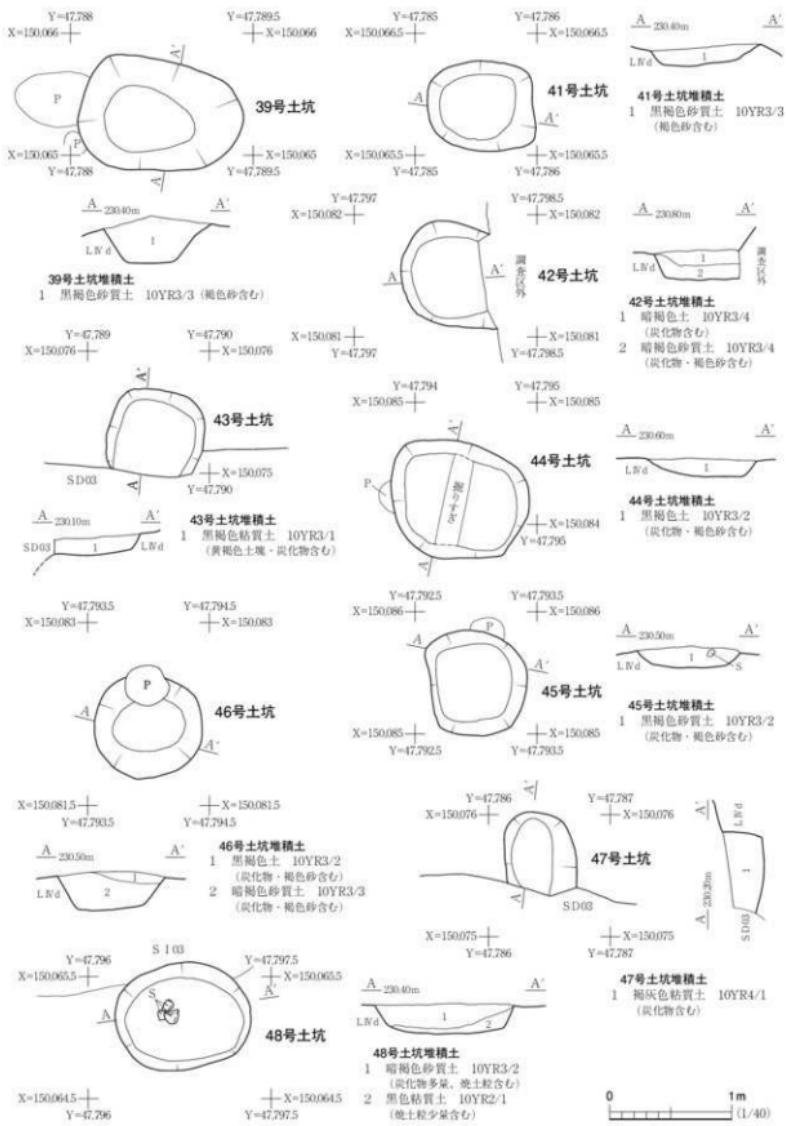


図32 39・41~48号土坑

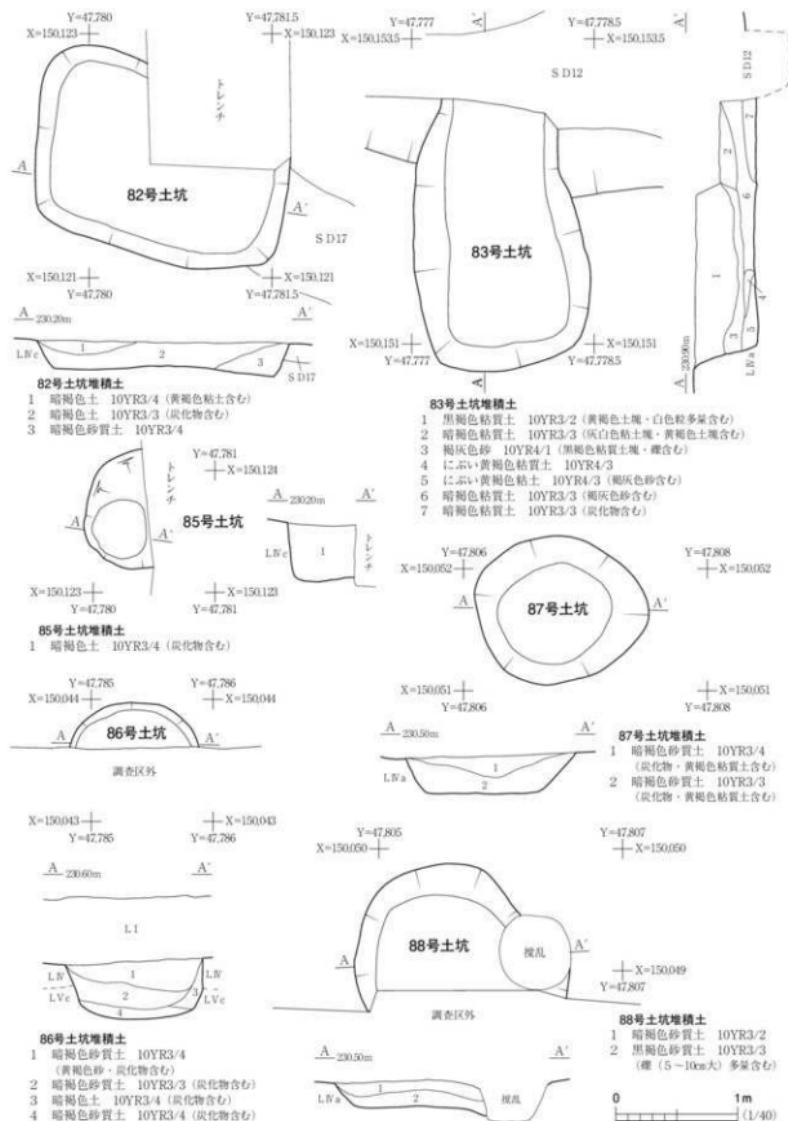


図37 82・83・85～88号土坑

る。壁はかなり外傾し、底面は平坦である。堆積土は1層で、自然堆積を考えている。

遺物は陶器1点、かわらけ3点、古銭1点が出土した。図42-17は陶器の古瀬戸で、水注の注である。灰釉が施されている。

39号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

47号土坑 S K 47 (図32・42、写真27)

47号土坑は、調査区南部のB 12グリッドL IV d上面で検出した。3号溝跡と重複し、新旧関係は本土坑が古い。平面形は南壁が欠損しているが楕円形であろう。規模は長軸が現状で64cm、短軸が59cm、深さは31cmである。壁は直立気味に立ち上がり、底面は皿状に窪む。堆積土は1層で、3号溝跡の構築に際し、埋め戻された可能性が高い。

遺物は陶器1点が出土した。図42-18は陶器の常滑焼で、壺もしくは壺である。

47号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

49号土坑 S K 49 (図33・42、写真27)

49号土坑は、調査区中央部のC 11グリッドL IV d上面で検出した。小穴と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸が1.78m、短軸が1.09m、深さは0.12mである。壁は外傾し、底面には凹凸がみられる。堆積土は1層で、自然堆積と考えている。

遺物は陶磁器2点、かわらけ15点が出土した。図42-19は青磁の杯もしくは皿である。

49号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

54号土坑 S K 54 (図33・43、写真28・50)

54号土坑は、調査区中央部のC 10・11グリッドL IV d上面で検出した。63号土坑と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が93cm、短軸が77cm、深さは25cmである。壁は東半部が外傾し、西半部は直立気味に立ち上がる。底面は皿状に窪む。堆積土は1層で、焼土を含むことから人為堆積であろう。

遺物は陶磁器2点が出土した。図43-1は陶器の古瀬戸で、折縁深皿である。灰釉が底部外面を除き施釉されているが、被熱を受けていたため部分的に剥がれています。さらに、底部外面には回転ヘラケズリ調整が施されている。図43-2は青磁の盤である。釉を全面に施したのち、高台置付の釉を搔き取っている。

54号土坑の時期は出土遺物から中世で、陶磁器の優品が出土している。

(吉野)

72号土坑 S K 72 (図35・43、写真29・50)

72号土坑は、調査区中央部のC 9・10グリッドL IV d上面で検出した。73号土坑・小穴と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸が3.06m、短軸が

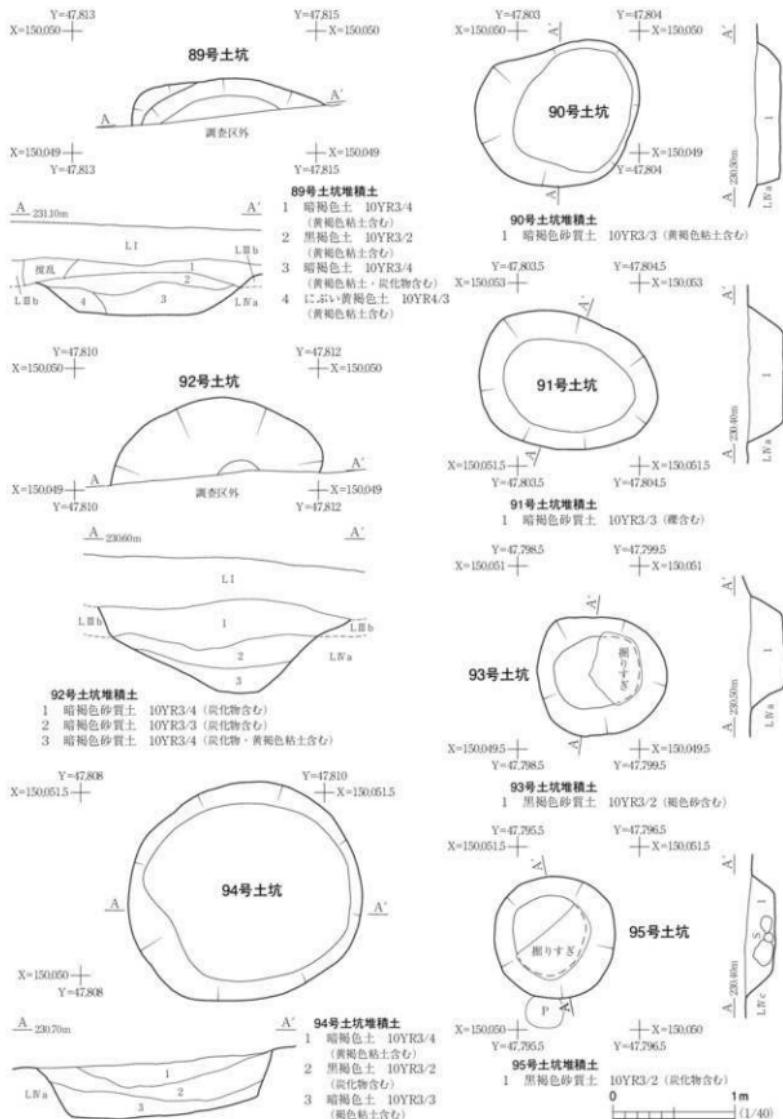


図38 89~95号土坑

模は長軸が1.49m、短軸が1.11m、深さは0.29mである。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、礫が含まれることから人為堆積を考えている。

遺物はかわらけ1点、鉄製品1点が出土した。図43-15はかわらけで、ロクロ成形である。図43-16は環状の鉄製品である。

91号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

98号土坑 S K 98 (図39・43、写真31)

98号土坑は、調査区南部のB 14グリッドL IV c上面で検出した。105号土坑と小穴と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は円形である。規模は径が1.07m、深さは0.22mである。壁は外傾し、底面は皿状に窪む。堆積土は1層で、炭化物が多量に含まれることから人為堆積を考えている。

遺物は土師器1点、かわらけ3点、鉄製品1点、土壁1点が出土した。図43-17は鉄釘で、釘頭が屈曲し、断面形が長方形である。

98号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

101号土坑 S K 101 (図40・43、写真31)

101号土坑は、調査区南部のC 14・15グリッドL IV c上面で検出した。97号土坑と重複し、新旧関係は本土坑が古い。平面形は不整長方形である。規模は長軸が1.91m、短軸が1.45m、深さは0.23mである。壁は緩やかに外傾し、底面は凹凸がみられる。堆積土は2層に区分し、堆積状況からみて人為堆積を考えている。

遺物は土師器1点、鉄製品8点が出土した。図43-18は鉄釘で、釘頭が屈曲し、断面形が方形である。図43-19は鉄串で、断面形は方形である。

101号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

103号土坑 S K 103 (図39・43、写真31)

103号土坑は、調査区南部B 15グリッド及びその周辺のL IV c上面で検出した。100・104・105号土坑、小穴と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸が1.36m、短軸が0.98m、深さは0.15mである。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。底面から礫がみられることから、人為堆積を考えている。

遺物は陶器1点が出土した。図43-20は在地産の甕もしくは壺である。

103号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。

(吉野)

111号土坑 S K 111 (図41・43)

111号土坑は、調査区南西端のB 18グリッドに位置する。9号住居跡と重複し、新旧関係は本土坑が新しい。平面形は西半分が調査区外にあるため明確ではないが、隅丸長方形であると想定し

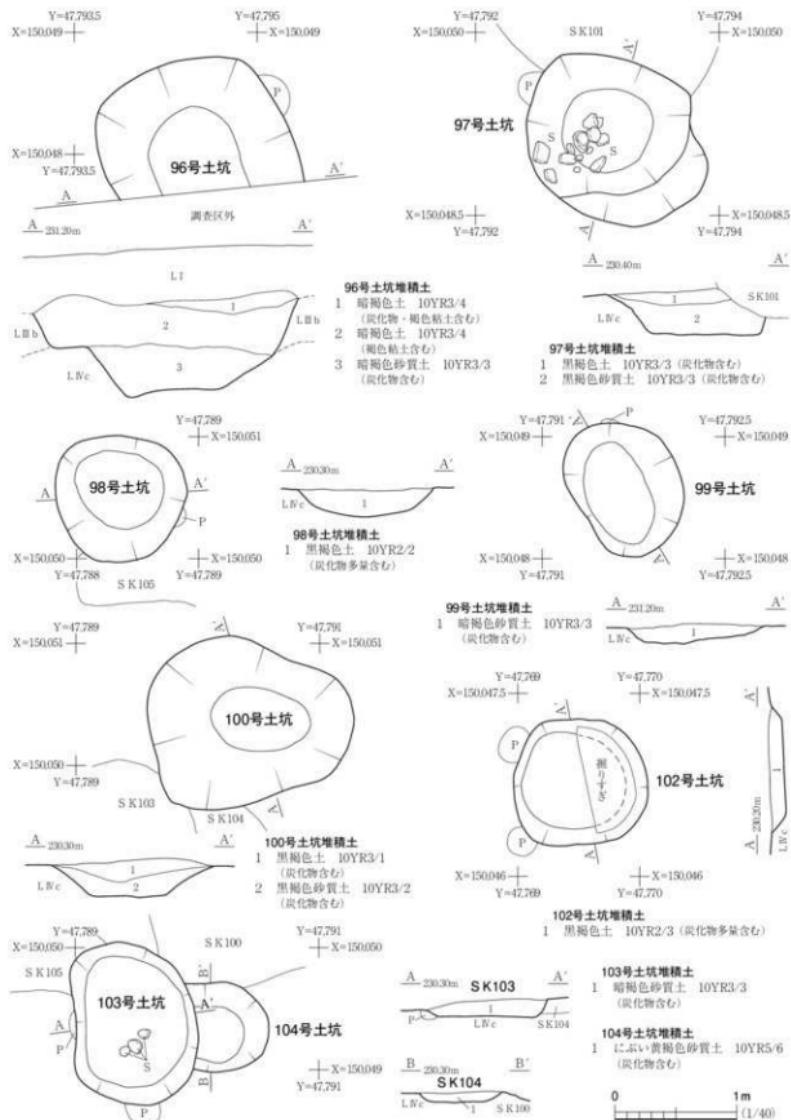


図39 96~100・102~104号土坑

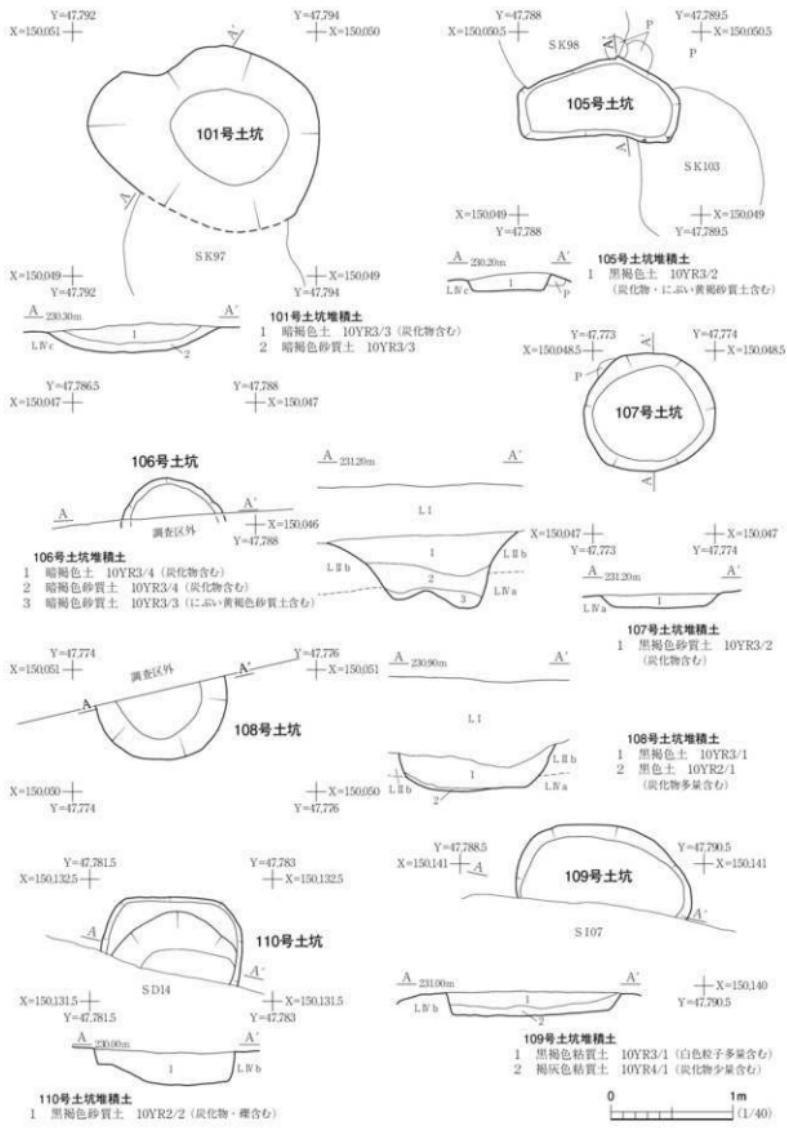


図40 101・105~110号土坑

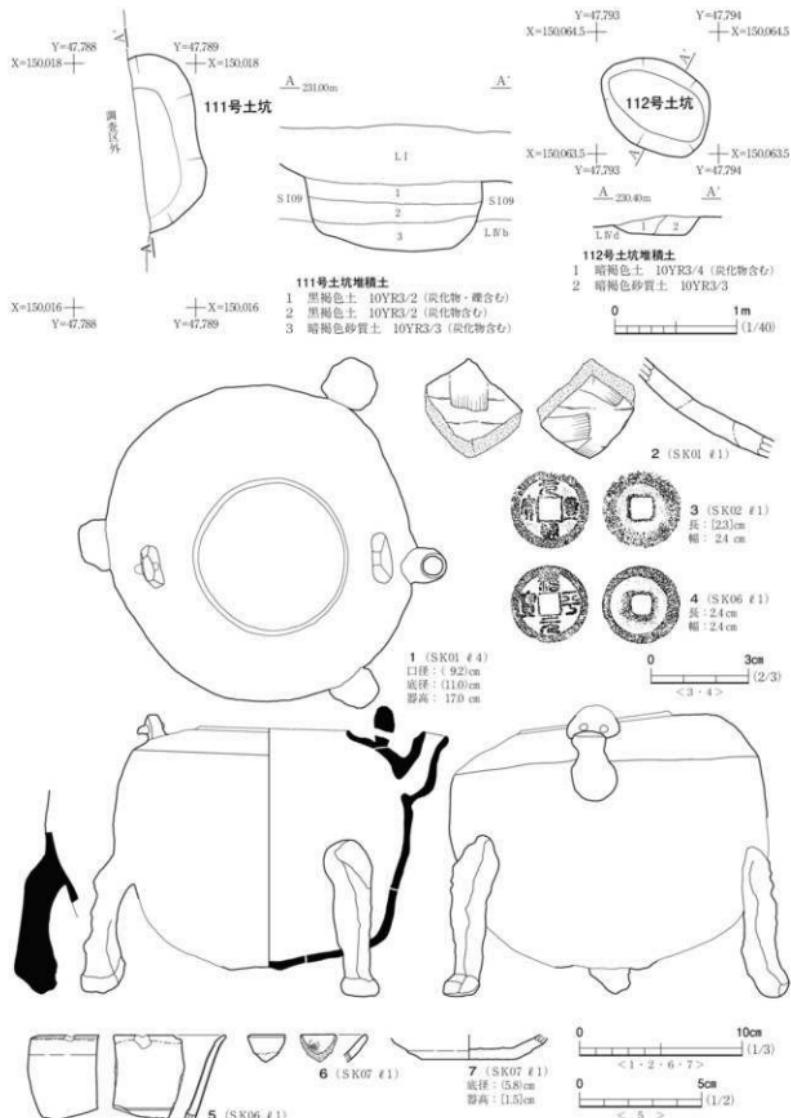


図41 111・112号土坑、土坑出土遺物

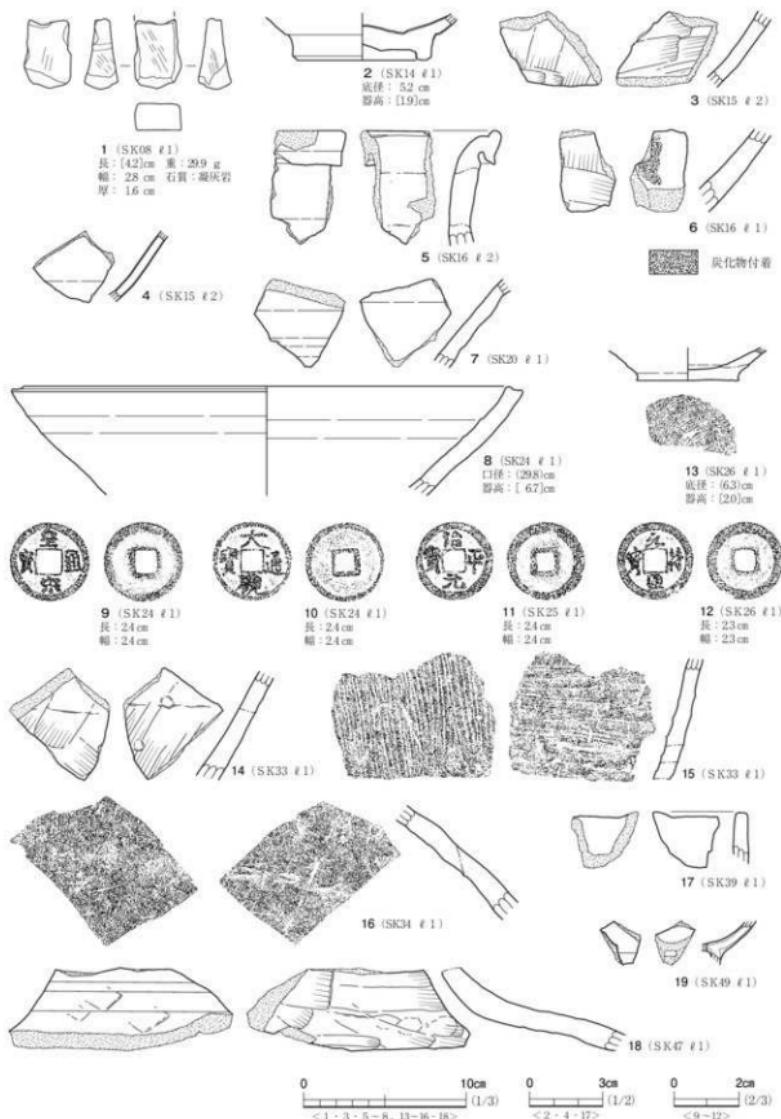


図42 土坑出土遺物（1）

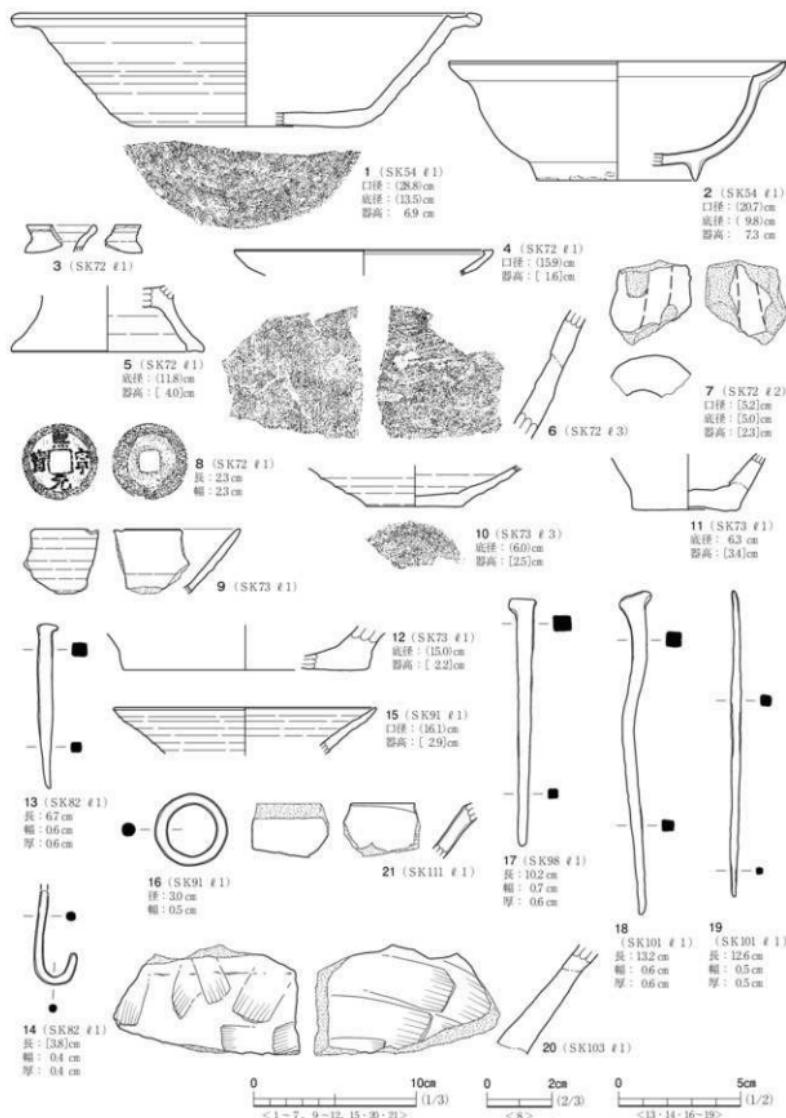


図43 土坑出土遺物（2）

ている。規模は長軸が1.43m、短軸が現状で0.5m、深さは0.55mである。壁は外傾し、皿状に窪む。堆積土は3層に区分した。各層とも炭化物を含むことから、人為堆積を考えている。

遺物は土器3点、かわらけ1点、磁器1点、鉄製品1点が出土した。図43-21は青磁の盤である。111号土坑の機能は特定できないが、時期は出土遺物から中世である。
(吉野)

第5節 井戸跡

井戸跡は2基検出し、いずれも砂層を掘り抜いて構築されていた。1号井戸跡からは、井戸枠や多くの遺物が出土した。2号井戸跡については、安全面を考慮して調査を途中で断念した。

1号井戸跡 S E 01

遺構(図44、写真32)

1号井戸跡は、調査区中央のB11グリッドで検出された。検出面はLIVd上面である。69号土坑と重複し、新旧関係は本井戸跡が新しい。検出時の大きさと堆積土の状況から、本遺構は井戸跡と想定された。検出面が砂層で大変崩れやすかったため、遺構よりも広く掘り、土止めをする必要があった。

堆積土中からは、陶器類の他、古銭、碁石、骨の破片などが出土している。また、南西側には柱材の一部があった。

井戸の周囲約5mを方形に区切り、その内側の土層を全て取り去ることにした。このため、取り去る部分の堆積土の実測を行った。また、湧水が激しかったため、電動ポンプで水をくみ上げながら掘り下げを行った。

掘り下げると、調査区の深い遺構と同様に洪水堆積物とみられる砂質土の下には、黒褐色粘土が堆積し、その周りに埋土の粘土塊を多量に含む堆積土がみられた。

検出した井戸枠は、隅柱とともに、方形に組まれていた。隅柱の間には縦方向の細長い板を並べて枠板とし、これを桟木と思われる横木でおさえていた。井戸枠の構造から、方形縦板組隅柱横桟型の井戸であることが分かった。また、東部の枠板は土圧で西側に倒れこんでいることもわかった。底面には達しなかったが、約50cm掘り下げた段階で平面図と断面図を作成した。

井戸枠の半分を掘り下げたところで、縦板の遺存状況が良く分かり、この段階で、断面図と井戸枠の立面図を作成した。しかし、まだ底面に達することが出来なかった。

さらに、掘削途中で砂層と黒褐色粘土層の境界から湧き出す水のために、その側の土止めが崩落しかかったため、そこで手作業による調査を断念した。

井戸跡には、崩落部分がありそのままでは危険であったため、国土交通省、県文化財課と協議し、埋め戻すこととした。その過程で、まだ掘削が及んでいない北半部と下部について、重機のアームを使って、木枠等とともに慎重に取り上げた。特に井戸枠内の土から、土器類の他、井戸枠

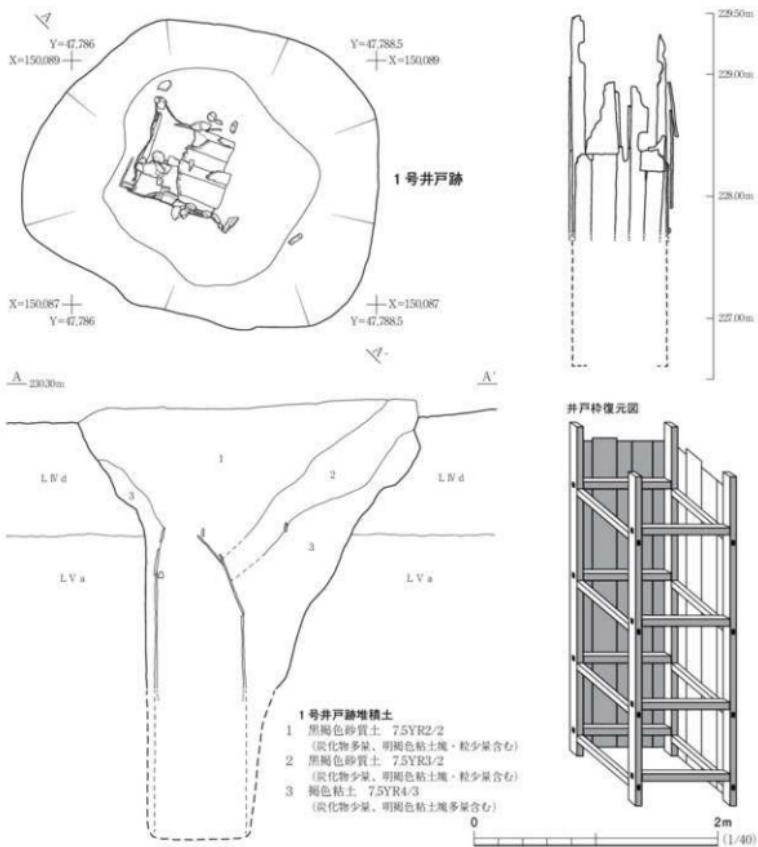


図44 1号井戸跡

類の抽出を行った。

井戸枠材や内部の木製品類については、選別後にすべて水洗いした。その中で、木製品と遺存状態が特に良好な井戸枠部材については、実測図作成と写真撮影後劣化防止処理を実施した。残存状況の良くない井戸枠部材については、現地で写真撮影し、樹種同定が可能なサンプルを持ち帰ることにした。

本井戸跡は調査途中で、掘削を断念したため、遺構の全体像を明らかにすることはできなかったが、調査した中での明確になったことについて記載する。

まず、堆積土は、井戸枠内堆積土と井戸掘削時の裏込め土に分類される。井戸枠が残っていた遺

構下部以下では、井戸枠を境にして明瞭に分かれた。一方、上部では井戸枠崩落のため、裏込め土も井戸枠方向に流れ込む傾向が認められた。

井戸枠内堆積土は、崩落前の目視では2層に分層された。上部のものは黒褐色砂質土で、炭化物や焼土粒が含まれていた。下部のものは、やや粘質のある褐色砂質土で炭化物が含まれていた。

崩落土を含む裏込め土については、3層に分層された。上部に堆積している ℓ 1は、井戸枠中央部に流れ込むように堆積した明褐色粘土塊を含む黒褐色砂質土で、井戸枠上部が崩落後に流れ込んできたものと思われる。 ℓ 2は、井戸枠の外側に堆積する黒褐色砂質土で、 ℓ 1と比較して明褐色粘土塊の割合が多く、崩落前の裏込め土の状態を示しているものと思われる。 ℓ 3は、下部に遺存していた井戸枠の外側にある、崩落していない褐色の裏込め土で、多量の明褐色粘土塊が混じっている。

これら堆積土の状況から、本井戸跡については、廃絶後に一気に埋め戻したのではないと考えられる。

遺構検出面からの深さは、掘削を行った最も深い場所までの約2.2mであったが、重機で取り出した南側の隅柱は約2.8mあったところから、少なくとも3.2mはあったものと推定される。旧表土も想定すると、4m近い深さの井戸であったと思われる。

井戸枠の構造は、四隅に柱を立て、そこにはぞ穴をあけて桟木を組込み、その外側に縦板を並べて、裏に土を込める方形縦板隅柱桟木型の木組み井戸となっている。図44にその概要図を示した。井戸の大きさは、四隅の隅柱の芯々で約0.69m(2尺3寸)であり、深さは前述のとおり4m近いものであったと考えられる。

掘形は、検出面では、長軸2.95mの楕円形プランとして検出された。しかし、堆積土の状況から上部については、崩落によりかなり広がっているものと思われる。井戸枠の上部から掘形までの距離は約80cm程である。

遺物(図45~60、写真51~54)

1号井戸跡からは、土器類としては、土師器57点、陶器7点、磁器3点、繩文土器1点が、土製品としては、羽口1点、土玉2点が、金属製品としては、古銭4点、鉄製品10点、鉄滓160点が、木製品としては、井戸枠構成材を除いて、曲物など63点が、石製品としては、碁石2点、砥石1点が、その他骨が出土している。

以下、図示したものを解説する。図45-1・2・11はかわらけで、手づくね成形である。1・11が小皿で、2が皿である。11はヘソ皿状で、内面に刻書がみられる。

図45-3~9は陶器である。3・5・6・8・9は在地産で、4・7が常滑焼である。3・8・9が瓷器系で、3が小型壺、6が押印帶のみられる壺である。4・5・7~9は壺もしくは壺である。図45-12~14は青磁の碗である。12には鎬運弁文が、14には見込に陰花文が施されている。

図45-15は土師器高杯の脚部で、6世紀代の所産であろう。

図45-16は繩文土器で、網目状撲糸文が施されている。繩文時代晩期中葉の粗製深鉢であろう。

図45-17は羽口の先端部で、溶着溝がみられる。

図45-18・19は碁石の黒石で、円礫を利用している。図45-20・21は土玉で、穿孔はされていない。図45-22は砥石で、全面にわたって使用されている。

図46-1～7は鉄釘で、釘頭が屈曲している。6・7の先端部側が大きく曲がっている。図46-8は雁股旗の残片とみられる。

図46-9～12は古銭で、9は北宋銭の「元豐通寶」(初鑄1078年)、10は唐銭の「開元通寶」(初鑄621年)、11・12は遺存状態が悪く、銭貨名を特定できない。

図46-13～20、図47～56は木製品である。図46-13～16は火付木で、13・15・16は先端が丸く、14は斜めに切り落した両端が炭化している。図46-17～19は串で、19は3箇所で破断している。

図46-20、図47～56は曲物で、側板と底板が分離している。図46-20、図47～55は側板、図56は底板である。図46-20、図47～49、図51-1～4、図52-3は側板の結合部で、樹皮を用いている。図47-1、図49-1・2・4・5、図50-1、図53-2～4、図54・55は側板内面にケガキ線が施されている。図47-1、図49-1・2・4、図50-1、図54-6はケガキ線が斜め方向で、それ以外は垂直方向である。図56-8・11の底板には漆状の付着物がみられる。なお、図50-1と図53-1は同一個体である。

図57～60は井戸枠構成材である。まず、図57・58の隅柱については、桟木を入れたホゾ穴以外に穴は見当たらず、建築部材の転用と言うよりも井戸専用に作られた部材である可能性が高い。一番残りの良かった図57-1の北東隅柱で、太さ18×22cm、長さ279cmであった。ホゾ穴は約66cm(2尺2寸)の間隔で開けられている。柱の強度を保つために、東西方向と南北方向では、約12cm(4寸)離してあけられている。東西方向の一番下部は、柱材に切り込みを入れて、横板をそこに渡し、更にその直ぐ上の桟木は柱にホゾ穴を貫通させて固定する形状となっている。

図59は桟木で、両端にホゾが作り出されており、それを隅柱のホゾ穴に差し込む形で組み込まれている。上部の桟木は遺存状態が悪くなり細くなった形で検出されたが、下部のものは明瞭な工具痕を残している。図59-3は一番遺存状態が良いもので、その太さは8×10cmであった。

図60は板材で、幅10～20cm程度の複数の規格のものが、下部から積み上げられる形で据えられていた。図60-1・2は上部のもので、風化のためごく薄い状況で確認されたが、図60-3～5などの中部以下では、厚さ2cm程度のものが使われていた。縦板組みの中世の井戸跡では、規格品の薄い板材を使ったものや下部から上部まで1枚の板を使うものがあるが、本井戸跡では、厚めの板を比較的ランダムに縦方向に留めたものと思われる。

また、重機によって底面の土を取り去った際に、図47-1、図50、図53-1の大型の曲物も出土している。おそらく、本来一番底部に曲物を据えるタイプの井戸であったと思われる。

骨はタイの左主上顎骨であった(付章1)。

まとめ

本井戸跡は、出土遺物より、13～14世紀のものと思われ、掘立柱建物群からなる居住区域に伴

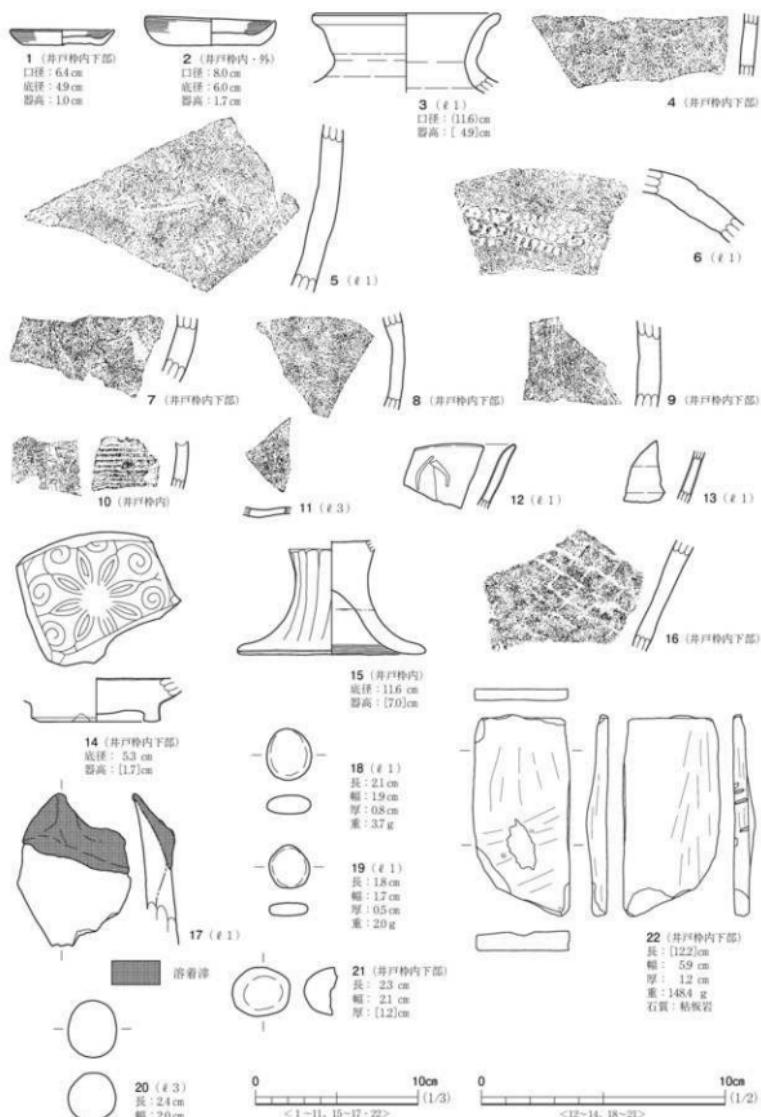


図45 1号井戸跡出土遺物（1）

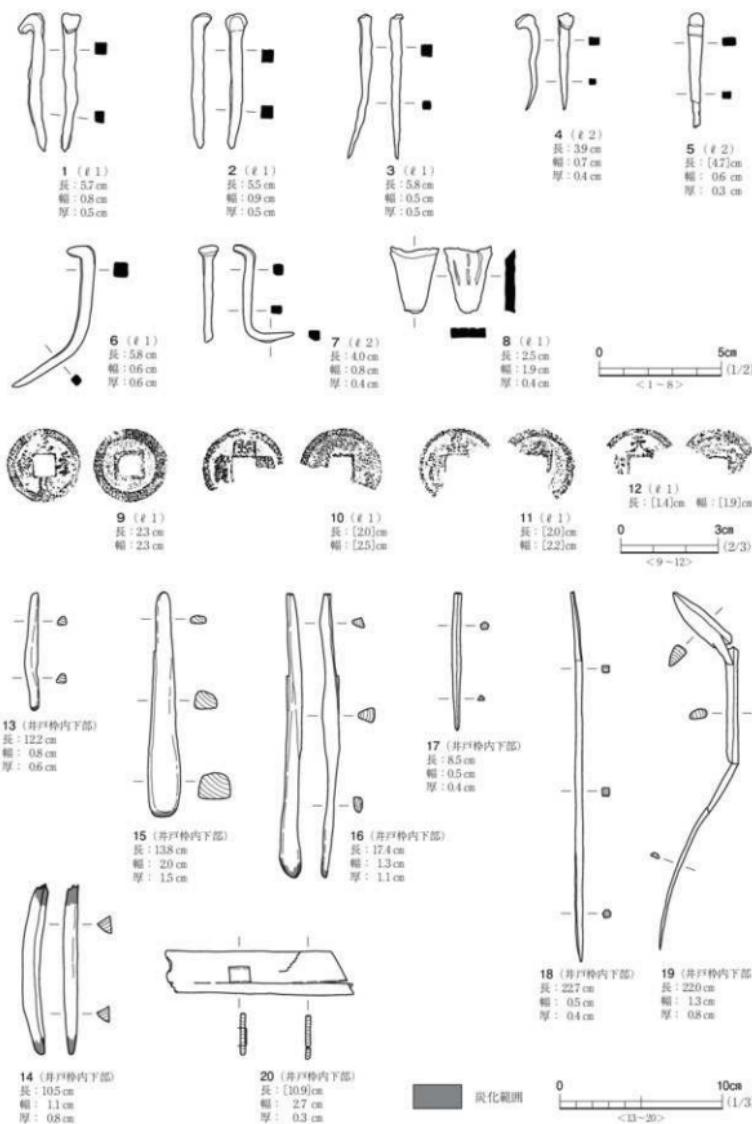


図46 1号井戸跡出土遺物 (2)

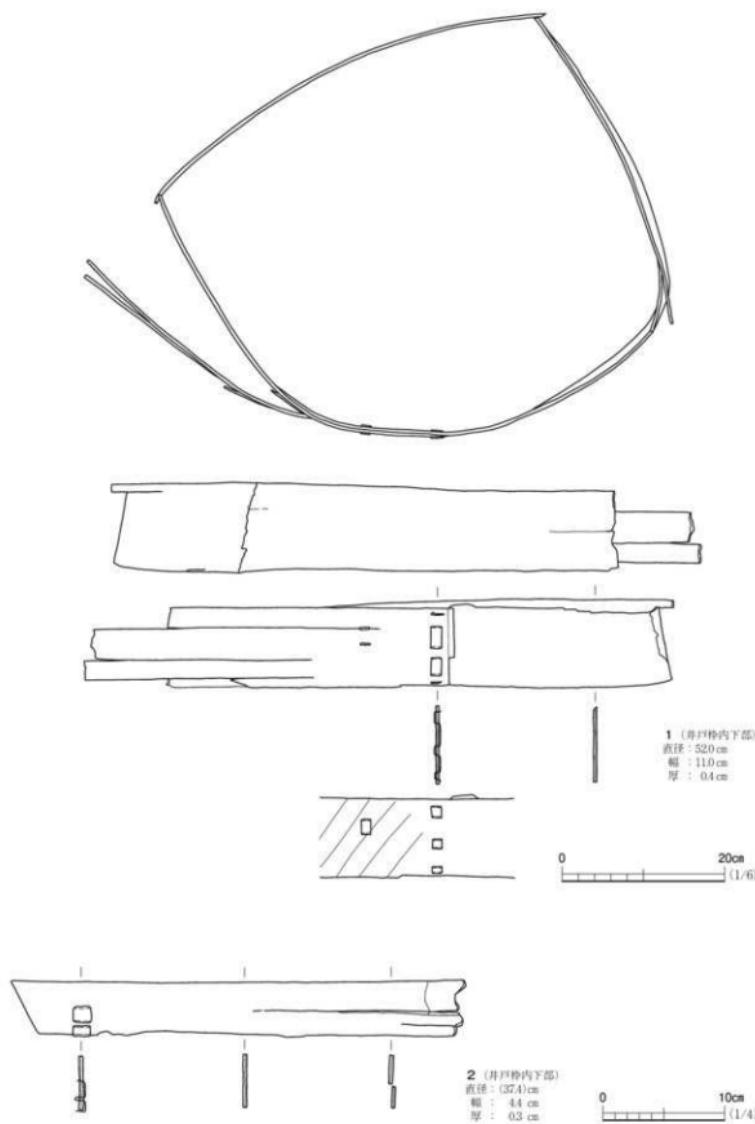


図47 1号井戸跡出土遺物（3）

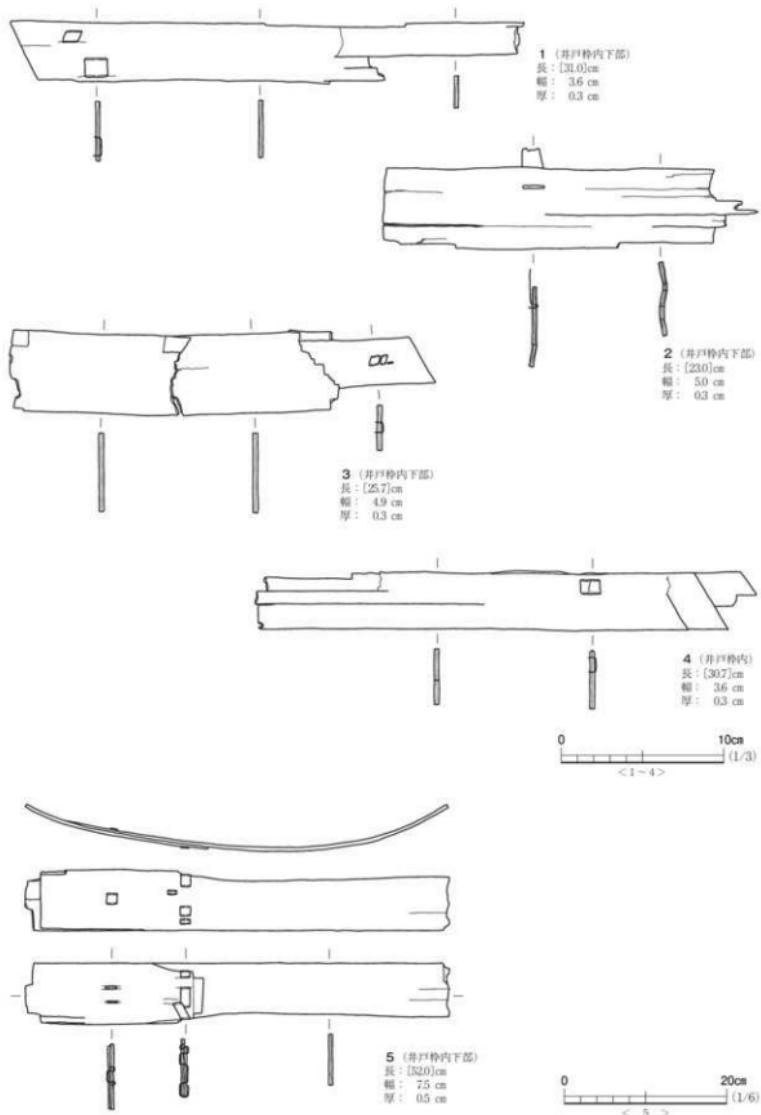


図48 1号井戸跡出土遺物 (4)

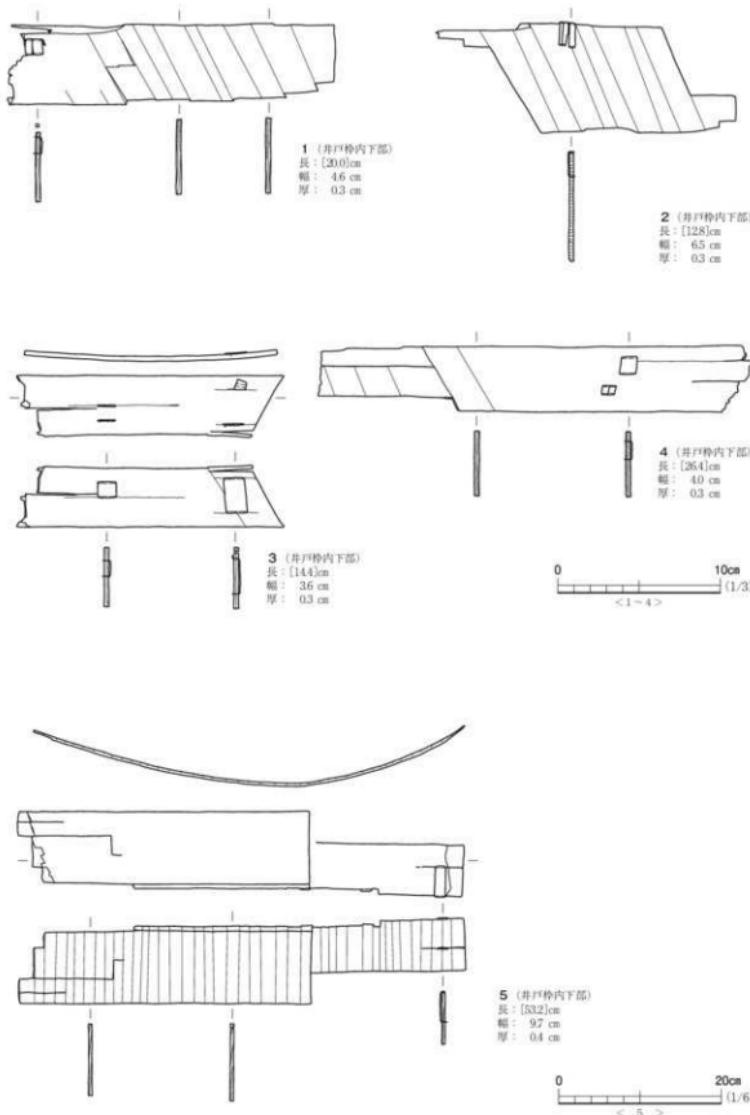


図49 1号井戸跡出土遺物（5）

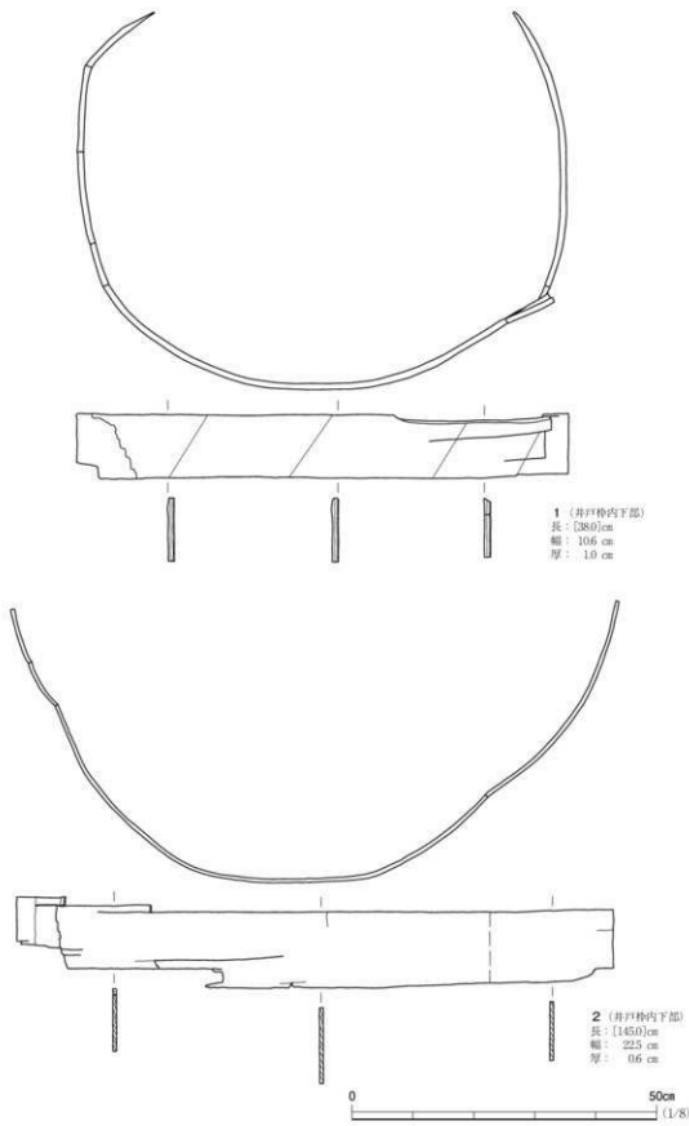


図50 1号井戸跡出土遺物（6）

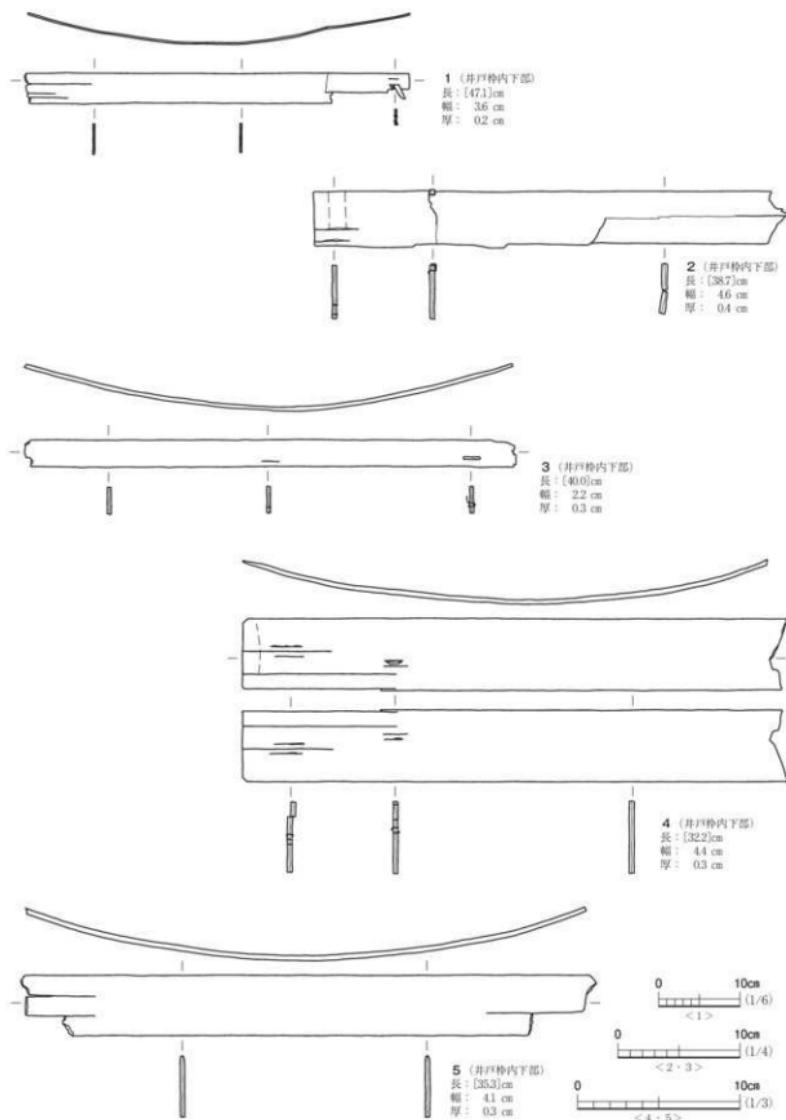


図51 1号井戸跡出土遺物 (7)

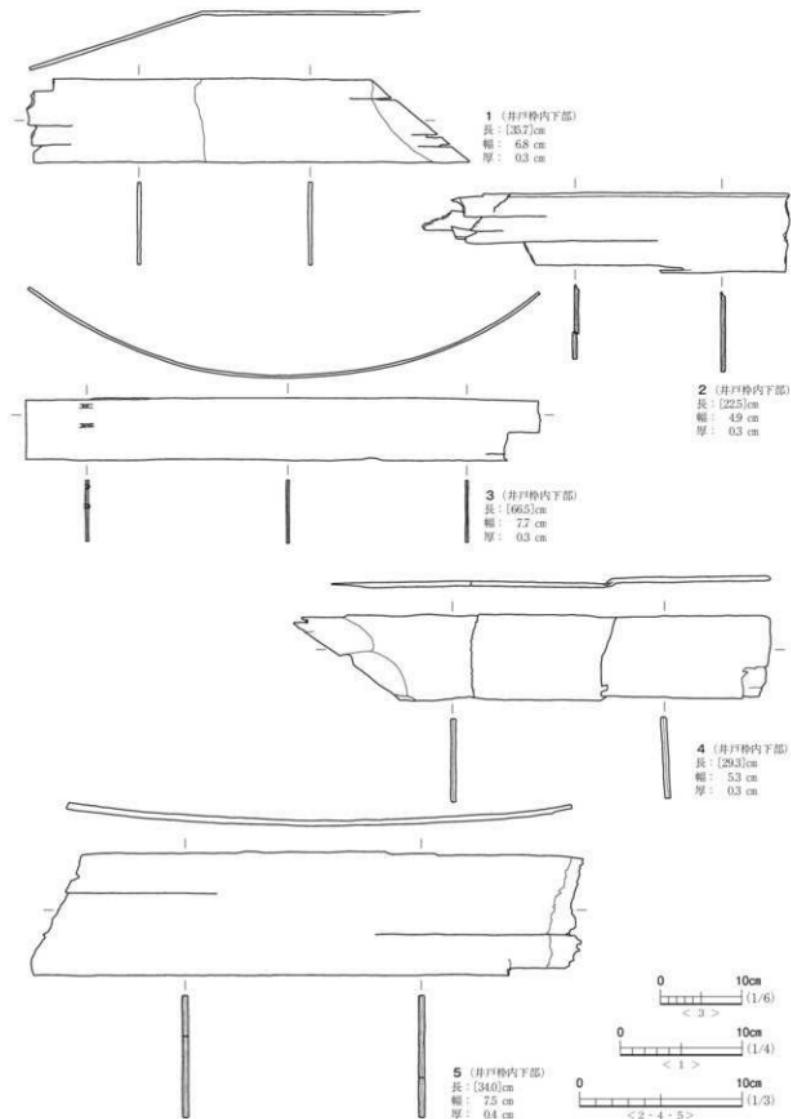


図52 1号井戸跡出土遺物 (8)

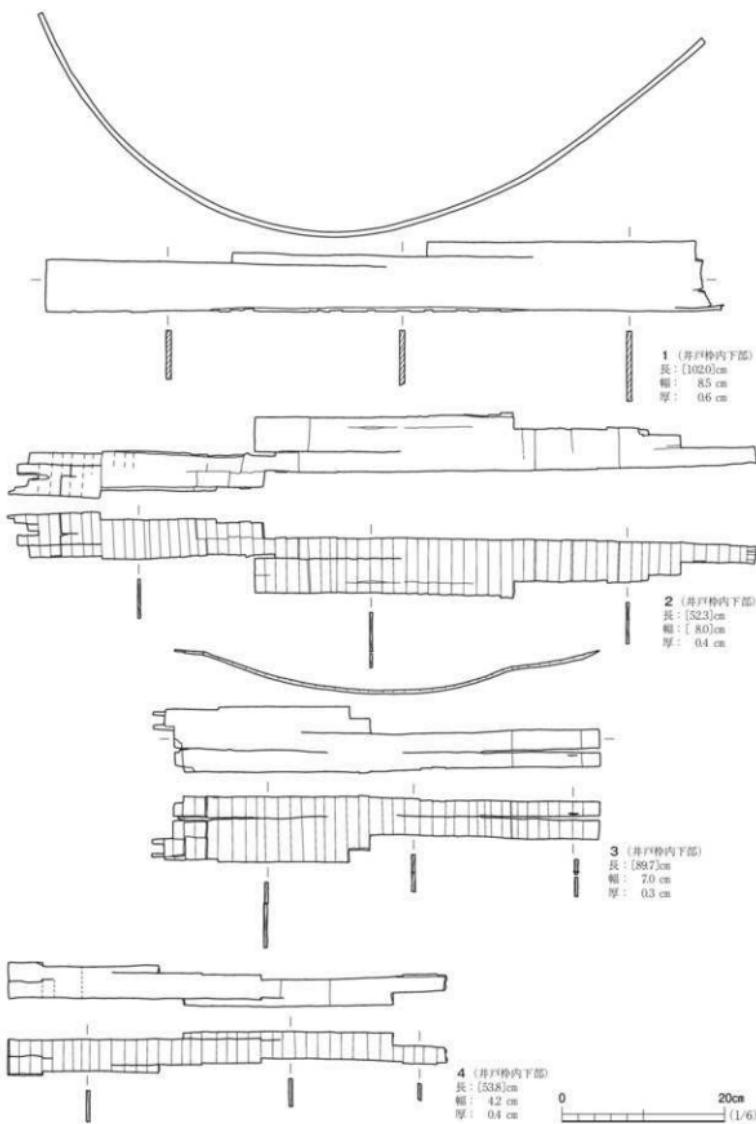


図53 1号井戸跡出土遺物（9）

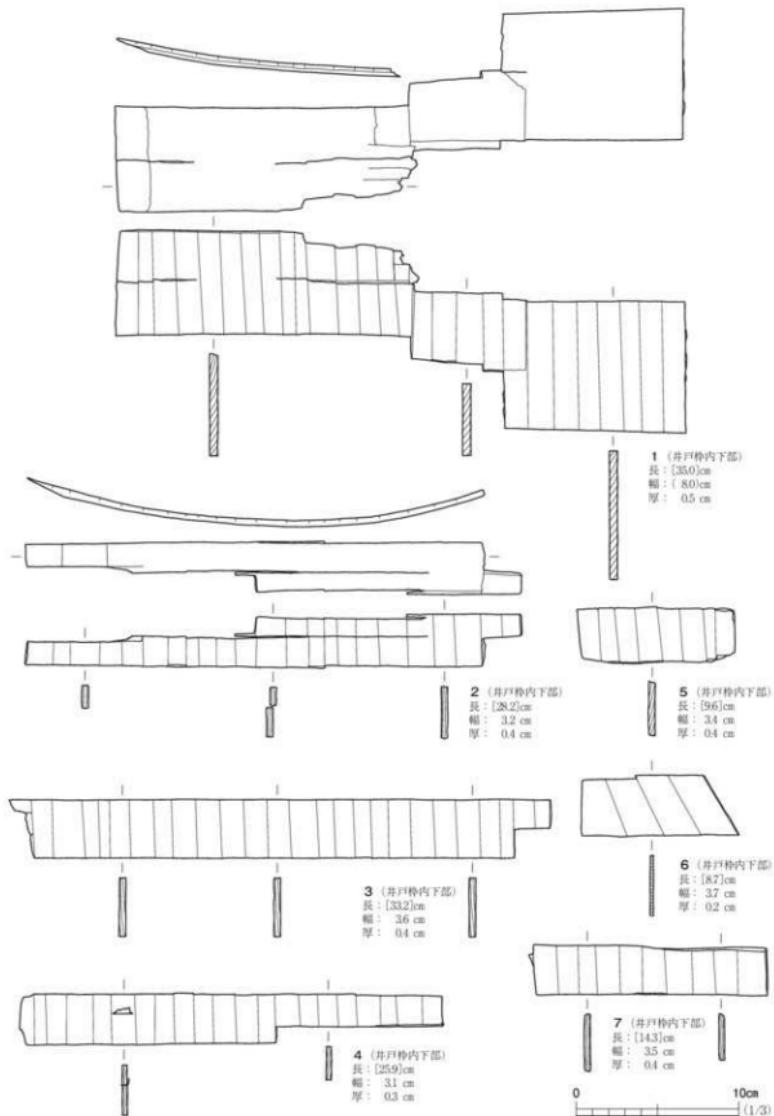


図54 1号井戸跡出土遺物 (10)

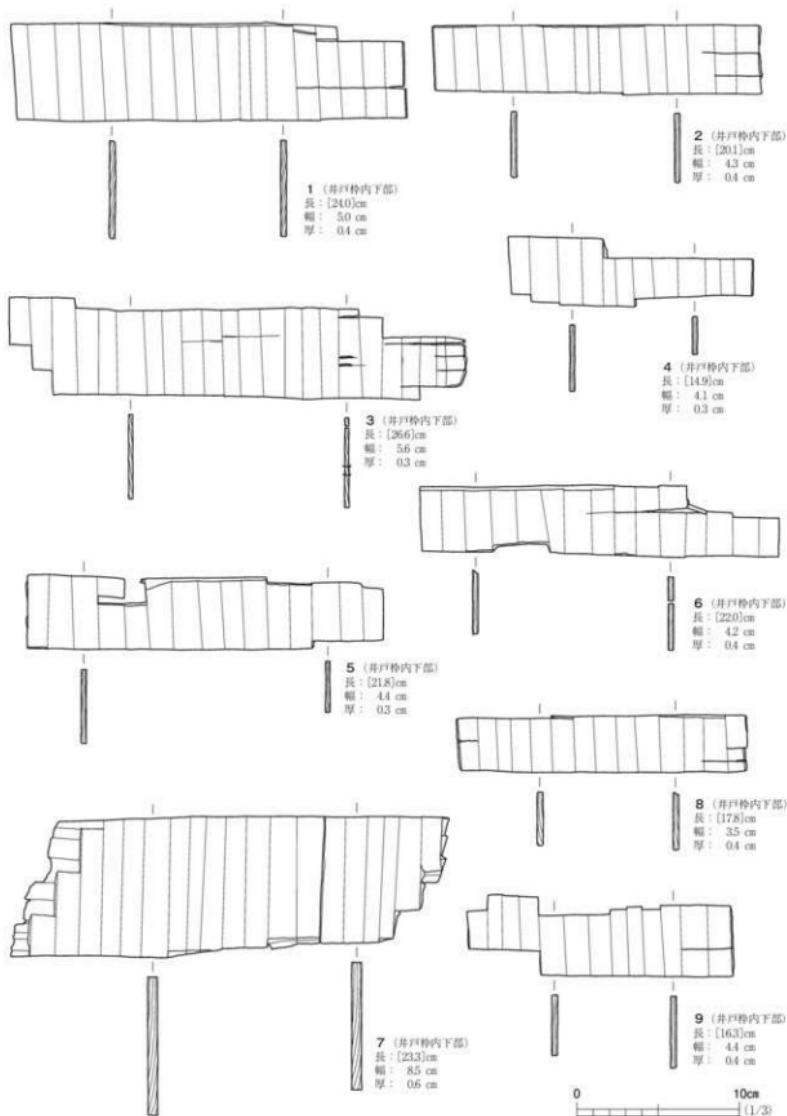


図55 1号井戸跡出土遺物 (11)

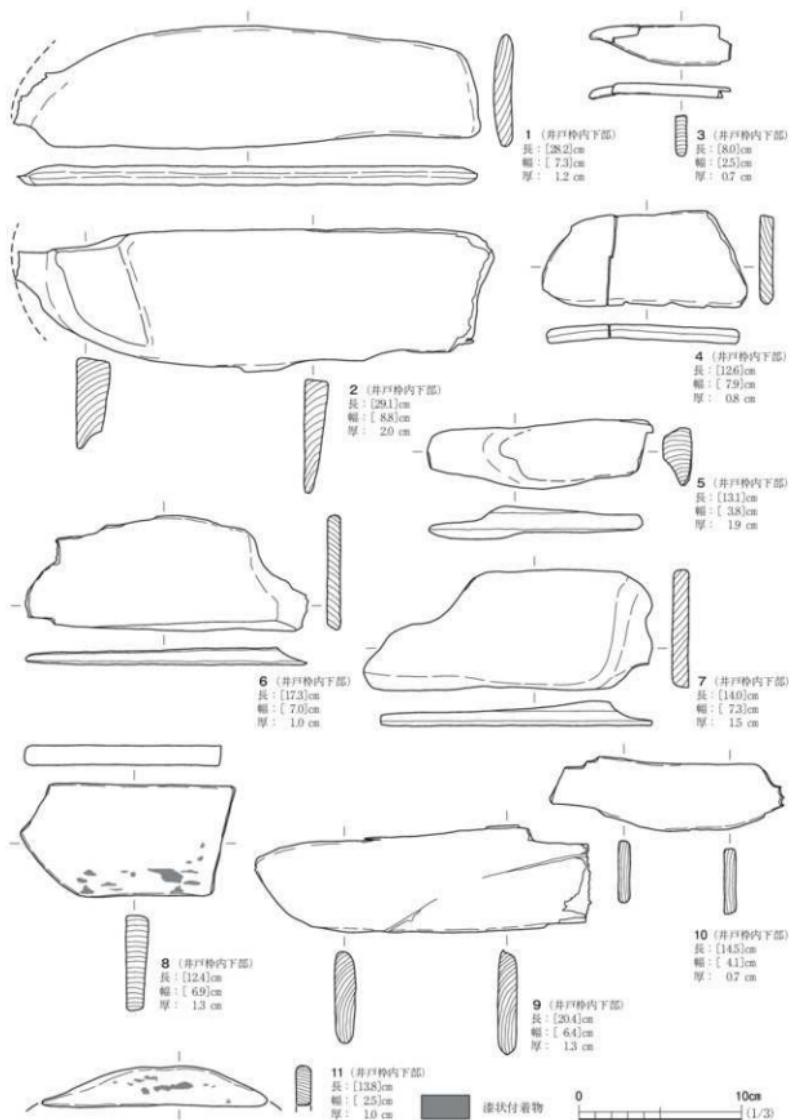


図56 1号井戸跡出土遺物 (12)

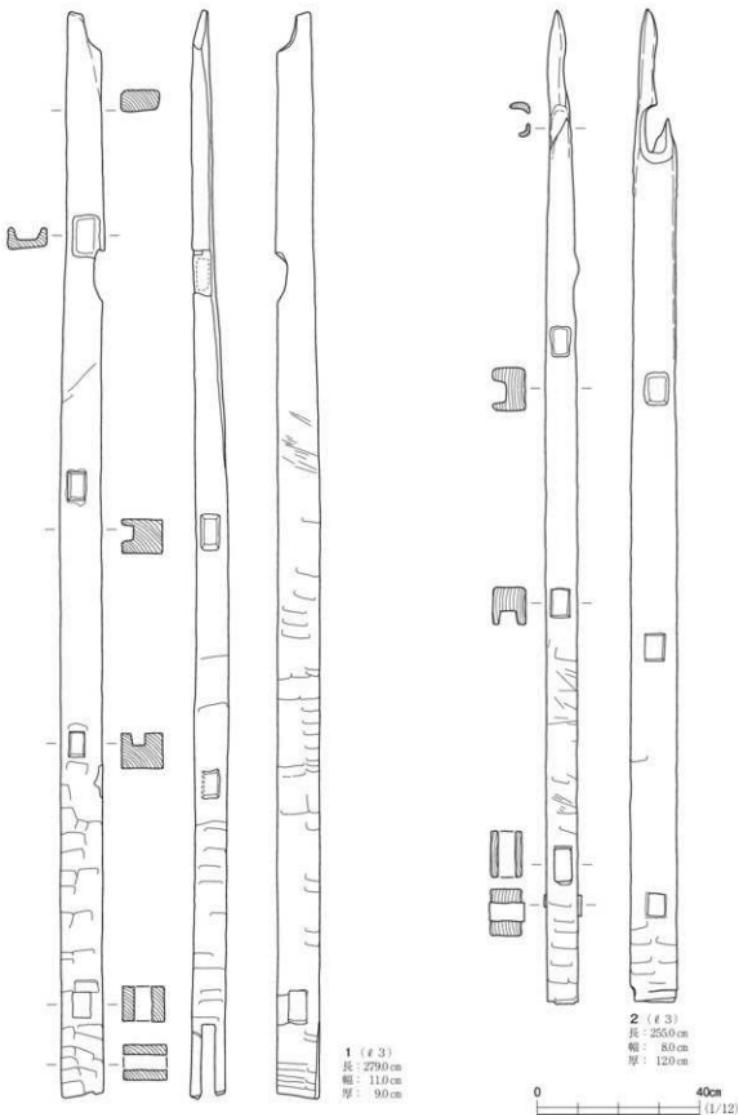


図57 1号井戸跡出土遺物 (13)

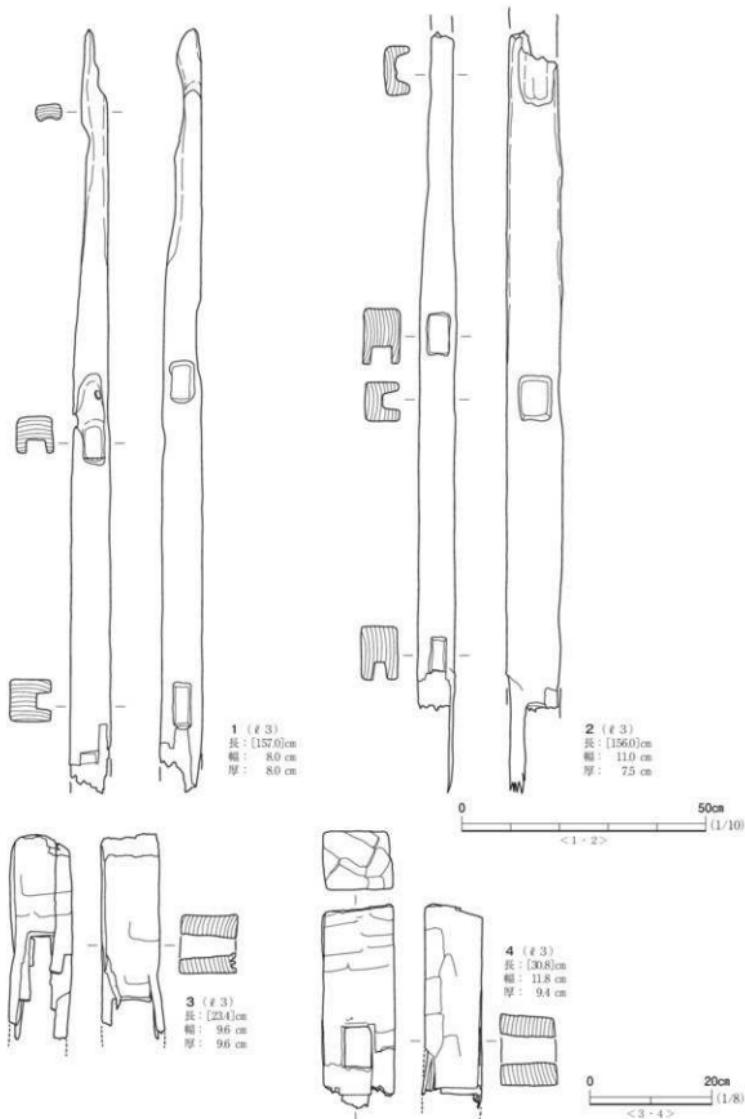


図58 1号井戸跡出土遺物 (14)

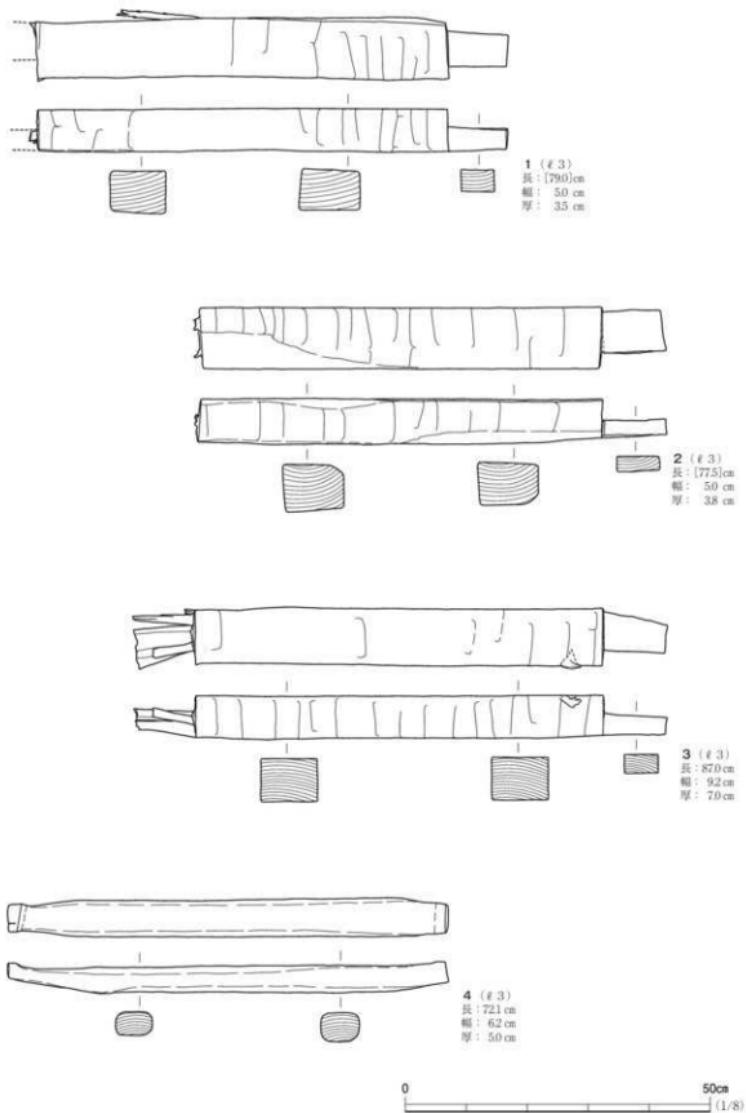


図59 1号井戸跡出土遺物 (15)

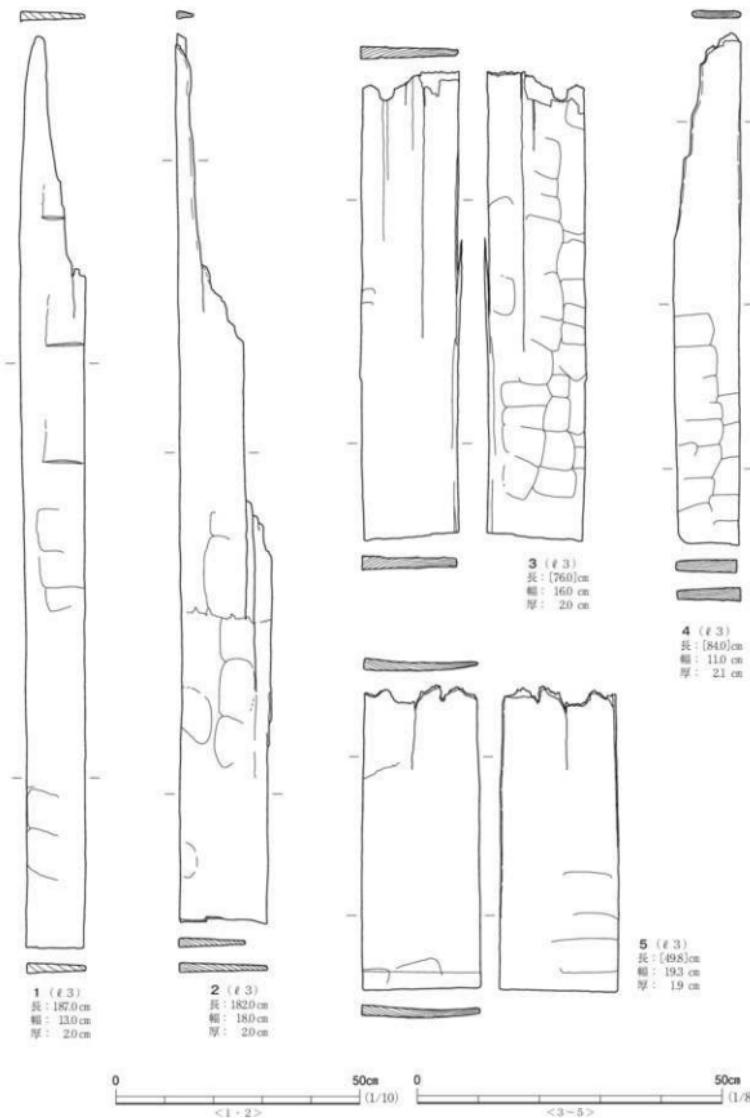


図60 1号井戸跡出土遺物 (16)

うものと思われる。当遺跡の阿武隈川を挟んで約1.5kmに位置している中世の町屋と主郭が検出された荒井猫田遺跡からも、全く同じ方形縦板隅柱横棟型の井戸が検出されていることも興味深い。

(藤谷・吉野)

2号井戸跡 S E 02

遺構(図61)

2号井戸跡は、調査区北部のA 4 グリッドL IV b 上面で検出した。83号土坑、12・13・23号溝跡と重複し、新旧関係は83号土坑、12号溝跡よりも古く、13・23号溝跡よりも新しい。平面形は西壁が調査区外にあるため、明確ではないが不整形とみられる。規模は長軸が5.25m、短軸が現況で4mである。深さは、安全対策のため完掘していないため、不明である。

堆積土は15層に区分し、黒褐色粘質土を主体とした人為堆積と考えている。

遺物(図61)

遺物は土師器72点、鉄製品1点である。図61-1・2は土師器で、1は高杯、2は杯とみられる。2の内面はヘラミガキが、外面はヘラナデの後に波状の沈線文が施されている。

まとめ

2号井戸跡はその詳細については不明であるが、1号井戸跡と平面形において類似し、規模では本井戸跡の方が大きい。このことから時期については、中世と考えている。なお、出土した土師器は、埋土に混入していたものと考えている。

(吉野)

第6節 溝 跡

溝跡は22条検出した。溝跡は3・4・15号溝跡のように幅が広いものから、5・6・10・22号溝跡のように幅が狭いものもある。概ね区画溝としての役割を果たしていたのであろう。なお、遺構番号は1～23号溝跡まで付けたが、7号溝跡は欠番とした。

1号溝跡 S D 01

遺構(図62、写真33)

1号溝跡は調査区南部のB・C 14グリッドL IV c 上面で検出した。1号溝跡は蛇行しながら東西方向に延びているが、その東側部分は調査区外にある。規模は長さが現状で125m、幅が1m、深さが0.2mである。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。

遺物は縄文土器1点が出土したが、流れ込みと判断している。

まとめ

1号溝跡からは時期と示すような遺物は得られていないが、北側に並行する2号溝跡の時期を参

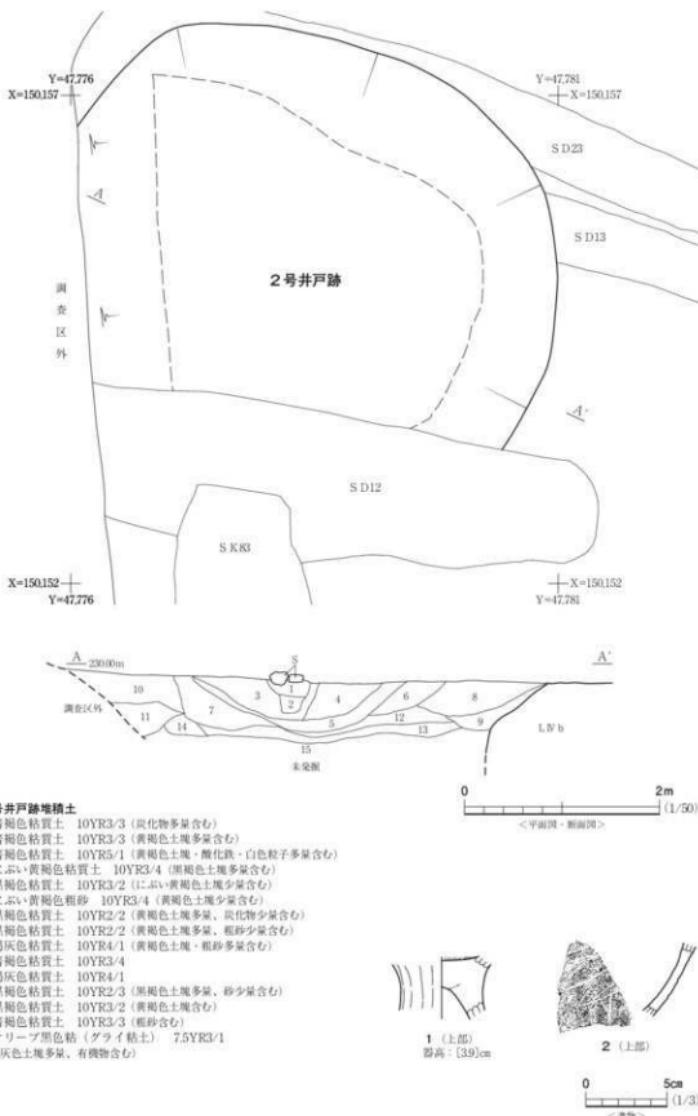


図61 2号井戸跡・出土遺物

考にすると本溝跡も中世と想定している。

(吉野)

2号溝跡 S D 02

遺構(図62、写真33)

2号溝跡は調査区南部のB・C 14グリッド、L IV c 上面で検出した。2号溝跡はほぼ直線状に東西方向に延びているが、その東側部分は調査区外にある。2号住居跡・小穴と重複し、本溝跡からみた新旧関係は2号住居跡が古く、小穴が新しい。

規模は長さが現状で14.8m、幅が1.8m、深さが0.2mである。壁は緩やかに外傾し、底面は凹凸がみられる。堆積土は2層に区分し、人為堆積とみられる。

遺物(図62、写真34)

遺物はかわらけ2点が出土し、図62-1・2に示す。1は小皿でロクロ成形である。内外面に油煙が付着していることから、灯明皿として使用されていた。2は小皿で手づくり成形である。

まとめ

2号溝跡は主軸方向が3号溝跡と一致することから、区画溝と考えている。時期は出土遺物から中世を考えている。

(吉野)

3号溝跡 S D 03

遺構(図63、写真35)

3号溝跡は、調査区中央部のB・C 12グリッドに位置し、検出層位はL IV dである。重複する遺構は1号住居跡、24・25・27・43・47号土坑、小穴で、新旧関係は1号住居跡と43・47号土坑より新しく、24・25・27号土坑、小穴より古い。

本遺構は、調査区を東西に横断して延びる幅広い溝跡である。全長は検出された範囲で東西約15m、最大幅は約2.9mである。なお検出の段階では判然としなかったが、土層断面の観察や溝底面の高低差から、掘り直しが行われていたことが明らかとなった。当初の溝掘削後に最低2回の掘り直しが行われており、さらに最も新しい溝は中央部を部分的に掘り直している事から、新しいほうからa 1→a 2→b→cとした。検出面からの深さは最も浅いcが0.3~0.4m、bで0.5~0.6m、a 2が0.6~0.7m、最も深いa 1で0.8~0.9mと、徐々に深く掘り直された様子がうかがえる。断面形は部分ごとにやや異なっているが、おおよそ逆台形となっている。底面は比較的平坦である。なお、a 1の底面では部分的に掘削時のものと見られる工具痕が確認された。

溝の堆積土は3箇所を図示し、最大で17層に分層した。このうちaに対応するのがA-A'のℓ 1~5、B-B'のℓ 1~11、C-C'のℓ 1~5である。bに対応するのがA-A'のℓ 12・13である。cに対応するのがA-A'のℓ 14・16・17、B-B'のℓ 14~17、C-C'のℓ 14・16・17である。

a~cの堆積土は全体的に砂が混じっており、部分的に粗砂や小礫がまとまって堆積している事

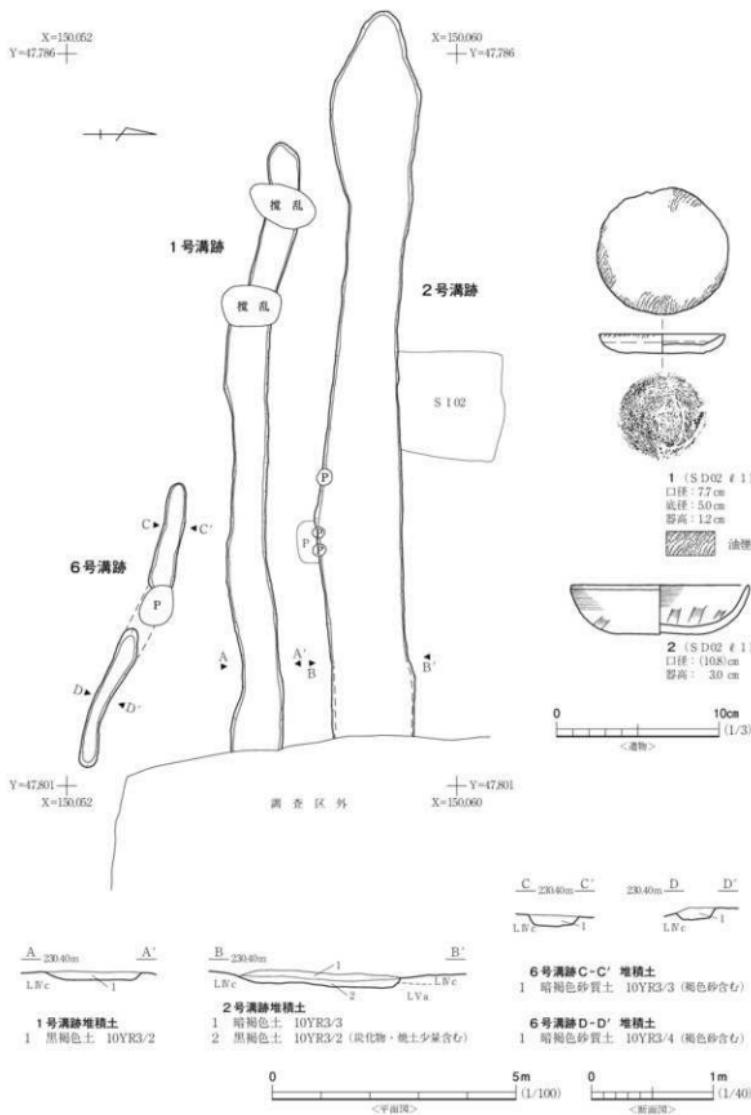


図62 1・2・6号溝跡、2号溝跡出土遺物

から、洪水など水の影響によって埋没した可能性がある。

遺 物(図64～66、写真54・55)

遺物は縄文土器4点、土師器81点、かわらけ52点、陶器48点、磁器10点、羽口2点、石製品1点、鉄製品12点、鉄滓36点、土壁9点、骨116点が出土した。遺物は多くが、南側のa1・2期の溝の堆積土中から出土しているが、意図的な廃棄状態を示すものは認められなかった。おそらく、溝の埋没過程において不要なものを廃棄する場となっていたことが考えられる。

図64-1～7はかわらけで、1は小皿、2～7は皿である。1・5がロクロ成形で、底部外面に回転糸切り痕がみられる。2～7が手づくね成形である。2・3の外面には指頭圧痕がみられる。4・6の内外面には油煙が付着していることから、灯明皿として使用されていた。

図64-8～16、図65-1～3は陶器である。図64-8～16は常滑焼で、8が小型壺、9～16は甕もしくは壺である。13の外面には押印がみられる。図65-1は渥美焼の壺で、袈裟擣文の変形とみられる横線と垂下する波状の沈線が認められる。図65-2・3は在地産で、壺器系のこね鉢である。3の高台は、先端が屈曲する特徴的な形状である。

図65-4～8は青磁で、図65-9～11は白磁である。4～8は椀で、4の見込には陰花文が、5～8には鎬連弁文が施されている。9・11は皿で、10は口禿椀である。9は打ち欠かれ、廃棄されている。

図65-12は須恵器甕、図65-13～15は土師器で、13・14が高杯の脚部、15が甕である。13の外面にはヘラミガキ、14の外面にはヘラナデが施され、15の内外面にはハケメが施されている。13が5世紀代、14・15が6世紀代であろう。図65-16は縄文土器で、縄文を地文とし沈線文を加えて文様を描いている縄文時代中期中葉の深鉢であろう。図65-17・18は羽口の先端部である。17は小型の羽口で溶着滓の付着がなく、18は大型の羽口で溶着滓の付着がある。図65-19は温石で、半分程度が欠損している。

図65-20は橢型鍛冶滓で、化学分析の結果、精鍛鍛冶滓であることが判明した(付章2)。

図66-1～5は鉄釘である。1～3は釘頭が屈曲し、4は釘頭の形状が明確ではなく、5は釘頭が欠損している。図66-6～8は不明鉄製品で、6は扁平な管状で、7は鉄鎌の残片の可能性がある。8は円盤状で中央部が窪んでいる。

なお、出土した骨について同定分析を行ったところ、ウマ・シカ・大型哺乳類などが判明した(付章1)。

ま と め

3号溝跡は東西方向に延びる区画溝で、掘り直しが行われていた特徴がある。主軸方向が3号住居跡・1号建物跡とほぼ一致することから、これらの区画溝としての性格がうかがわれる。時期は出土遺物から中世である。

(吉野・神林)

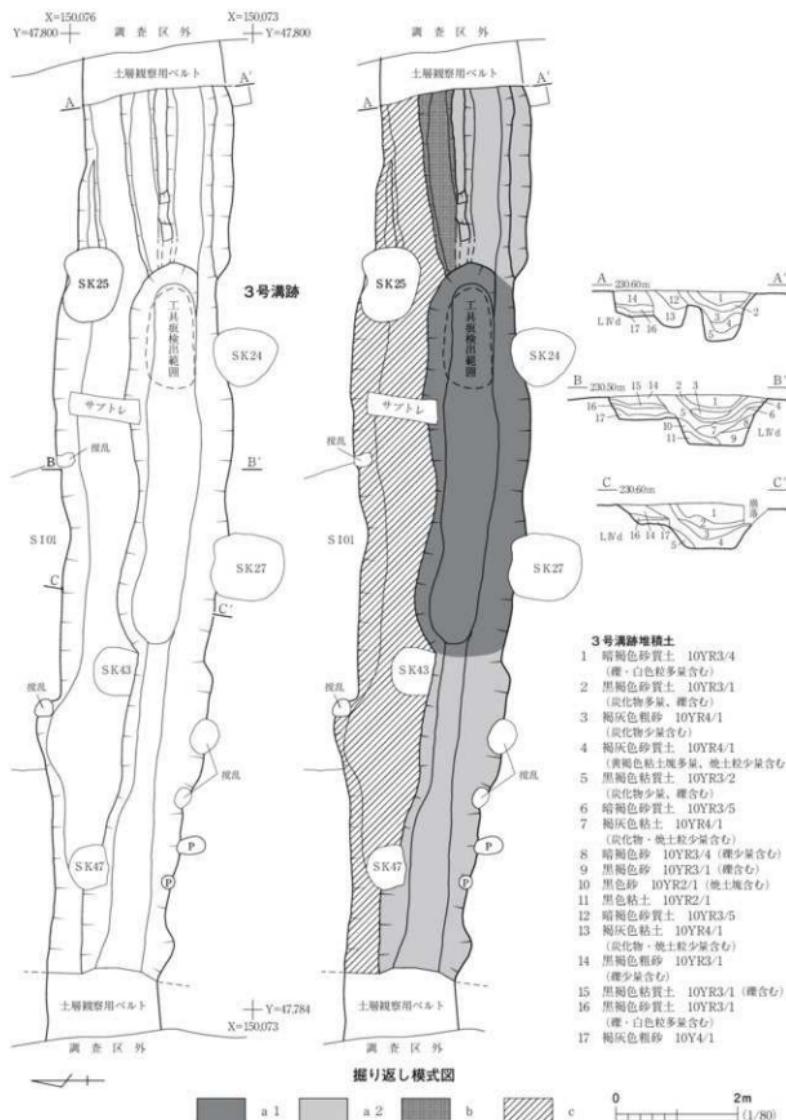


図63 3号溝跡

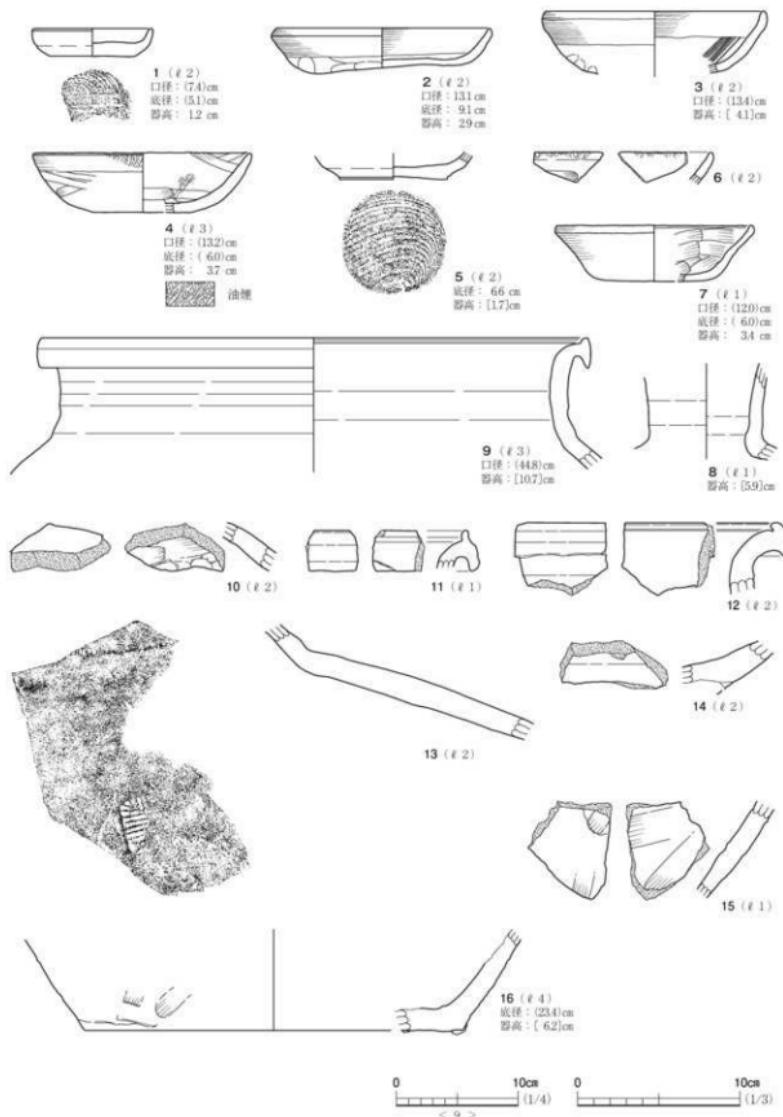


図64 3号溝跡出土遺物（1）

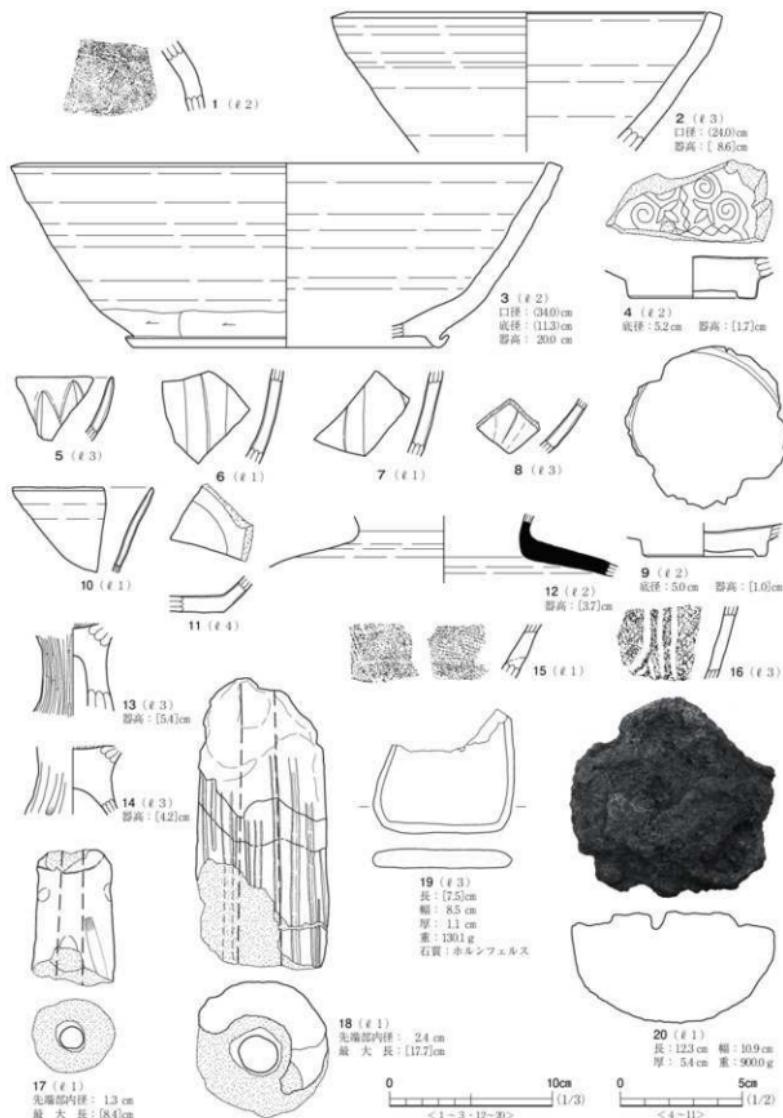


図65 3号溝跡出土遺物（2）

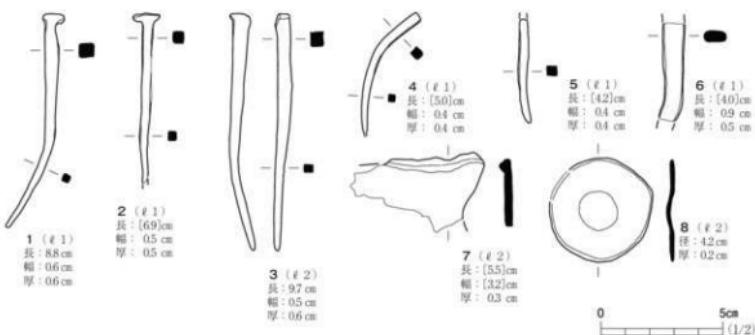


図66 3号溝跡出土遺物（3）

4号溝跡 S D 04

遺構（図67、写真36）

調査区中央部のB・C 9グリッドに位置し、検出面はL IV d上面である。重複する遺構は5号住居跡・78号土坑・10号溝跡、小穴である。新旧関係は本遺構が5号住居跡・10号溝跡より新しく、78号土坑より古い。小穴の新旧はそれぞれである。

本遺構は、調査区を東西に横断して延びる幅広い溝跡である。全長は検出された範囲で約13m、最大幅3m、検出面からの深さは最大で0.8mである。溝の断面形は逆台形となっており、底面は東に向かって緩く下るもの、平坦につくられている。

堆積土は3箇所を図示し、最大で5層に分層した。ℓ 1・2には黒色粘質土塊・黄褐色粘質土塊が含まれ、ℓ 3は検出面に近似する土で、ℓ 4・5には炭化物や礫が多く含まれていた。このことから、人為堆積を考えている。

なお、A-A'・ℓ 5の上面をみると掘り返しが行われた可能性がある。さらに、ℓ 4には動物骨らしきものも含まれていたが、遺存状況が悪く取り上げには至らなかった。

遺物（図68・69）

遺物は土師器67点、須恵器2点、かわらけ18点、陶器10点、磁器2点、石製品2点、古銭12点、鉄製品23点、鐵滓7点、土壁8点が出土した。遺物は一部の古銭を除いて、溝の全体から散漫に出土している。

図68-1はかわらけの小皿で、手づくね成形である。図68-3～5は陶器で、3・4は常滑焼の壺もしくは壺である。5は在地産の瓷器系で、こね鉢である。図68-6は白磁の皿で、高台畳付の袖を搔き取っている。図68-7は磁器で、近世の会津本郷焼である。

図68-2・8は土師器である。2は杯で、口縁部が短く仕上げられている。8は長胴壺で、口縁部と胴部に境に段がみられる。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面にはハケメが施されている。

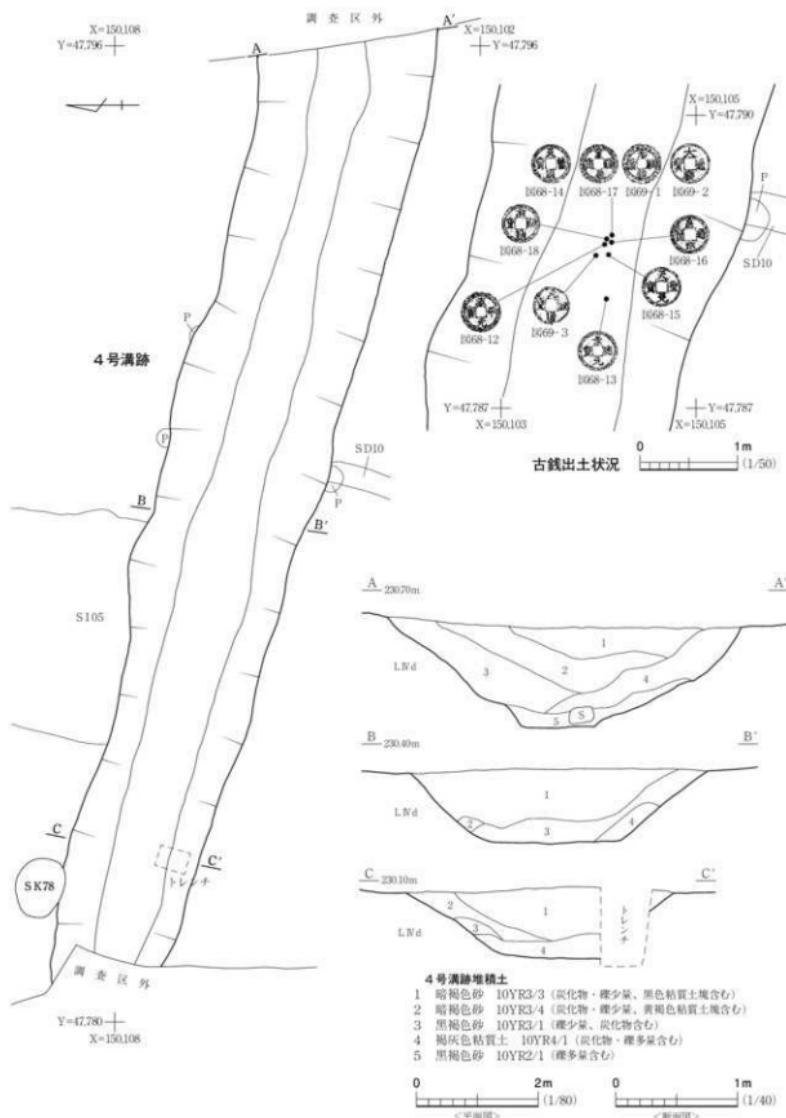


図67 4号溝跡・古銭出土状況

図68-9・10は砾石で、いずれも欠損している。9は4面にわたって使用され、10は2面のみが遺存していた。

図68-11は橢型鍛治溝で、化学分析の結果、鍛鍊鍛治溝と判定された(付章2)。

図68-12～20、図69-1～3は古錢の北宋錢である。このうち、図68-12～18、図69-1～3については、まとまって出土したため、その位置を図67に示した。さらに、図68-12・14・16～18、図69-1・2は重なって出土したため、その状況を写真36dに示した。その状況から、錢差しの状態で置かれた可能性が高い。

銭貨名と初鋳年は、図68-12「咸平元寶」(998年)、図68-13「景德元寶」(1004年)、図68-14「天禧通寶」(1017年)、図68-15「天聖元寶」(1023年)、図68-16・17「皇宋通寶」(1084年)、図68-18～20、図69-1「元祐通寶」(1086年)、図69-2「大觀通寶」(1107年)、図69-3「元豐通寶」(1078)とみられる。なお、同一の銭貨名であっても図68-17、図69-1のように外縁が幅広いものや、図68-20では篆書体のものもある。

図69-4～8は鉄釘で、釘頭が屈曲している。図69-9は錠、図69-10は鉄鎌とみられる。

まとめ

4号溝跡は東西方向に延びる区画溝である。3・4号建物跡と主軸方向がほぼ一致することから、これらの区画溝としての性格がうかがわれる。時期は出土遺物から中世である。(吉野・神林)

5号溝跡 SD 05

遺構(図70、写真34)

調査区南部のB 15、C 15・16グリッドに位置し、検出面はL IV c上面である。小穴と重複しており、古いものや新しいものがある。

溝は調査区を横断するように東西方向に延びている。全長9.7m、最大幅0.4m、検出面からの深さ最大0.1mである。溝の断面形は逆台形となっていて、底面は東にむかって緩く傾斜する。堆積土は1層で、黒褐色の礫が混じる砂層が堆積していたことから、自然堆積土とみられる。

まとめ

遺物は出土していないが、時期は古代～中世ごろとみられる。

(神林)

6号溝跡 SD 06

遺構(図62、写真34)

6号溝跡は調査区南部のC 14グリッド L IV c上面で検出した。本溝跡は東西方向に延びているが、一部が途切れている。小穴と重複し、新旧関係は小穴が新しい。

規模は長さ6.2m、幅0.5m、深さ0.05mである。壁は外傾し、底面には凹凸がみられる。堆積土は1層で、暗褐色砂質土が堆積しており、自然堆積土とみられる。

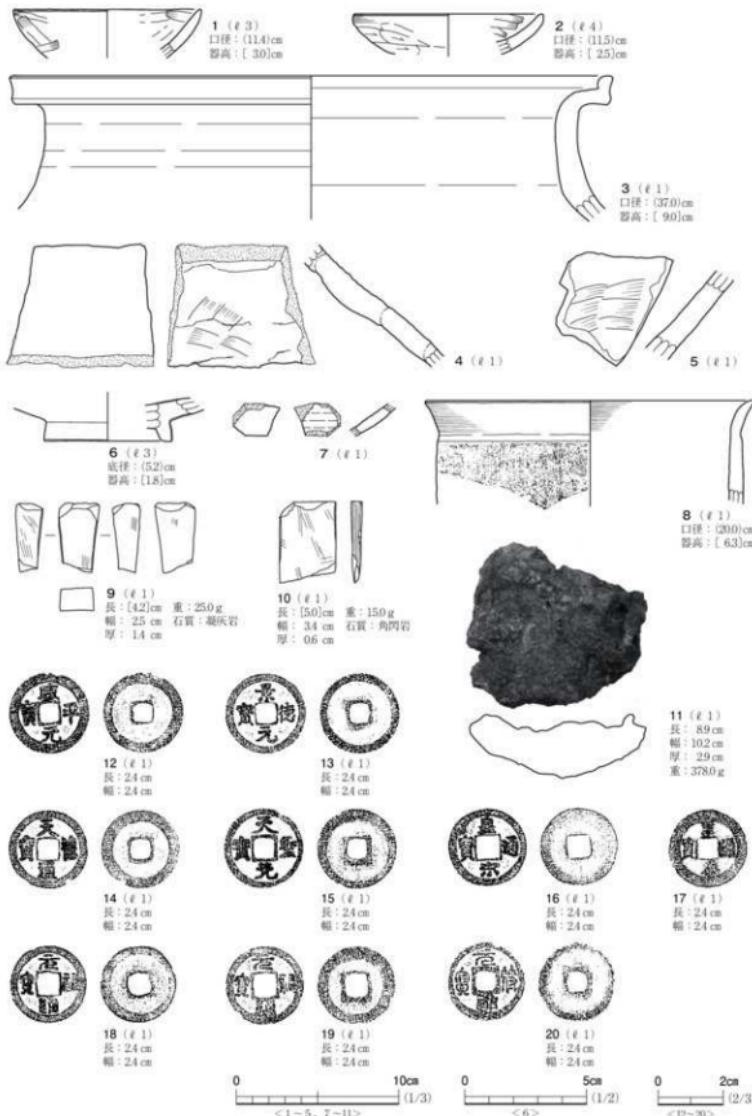


図68 4号溝跡出土遺物（1）

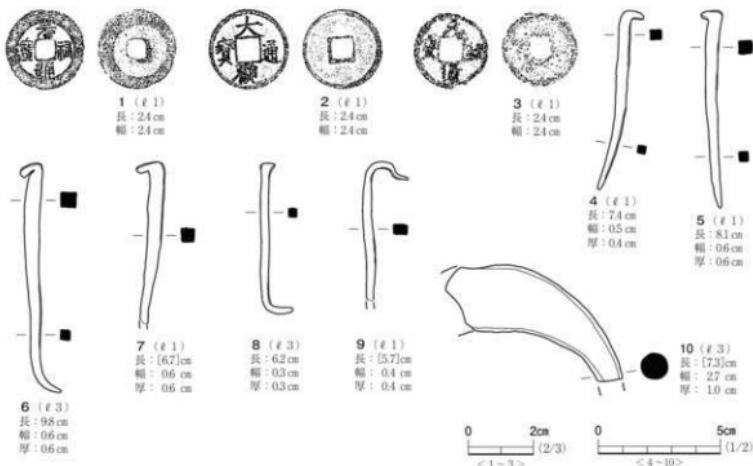


図69 4号溝跡出土遺物（2）

まとめ

6号溝跡は隣接する1・2号溝跡と主軸方向が一致しないため、時期差があるものと考えている。主軸方向からみると、5号溝跡とはほぼ一致することから、5・6号溝跡に挟まれた6・93・95・96・97・99・101号土坑などの区画溝としての性格がうかがわれる。時期については中世と考えている。

(吉野)

8号溝跡 S D 08**遺構(図70、写真37)**

8号溝跡は調査区西部のA・B 14グリッドL IV c上面で検出した。本溝跡は東西に延びているが、西端部が調査区外にある。規模は長さが現状で25m、幅が0.5m、深さが0.05mである。壁は外傾し、底面は皿状に窪む。堆積土は1層で、炭化物・褐色砂を含む黒褐色砂質土が堆積しており、自然堆積土とみられる。

まとめ

8号溝跡は東西に延び規模が小さい。隣接する8号住居跡と主軸方向がほぼ一致するので、8号住居跡と関連すると考えられることから、時期については中世と考えている。

(吉野)

9号溝跡 S D 09**遺構(図70)**

9号溝跡は調査区中央部のB 10グリッドL IV d上面で検出した。3号建物跡と重複し、新旧関

係は本溝跡が新しい。本溝跡は北西から南西方向に弧状を描いて延び、南側が開口している。規模は長さが3.1m、幅が1.2m、深さが0.3mである。壁は緩やかに外傾し、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、炭化物・褐色砂を含む黒褐色砂質土が堆積しており、自然堆積土とみられる。

まとめ

9号溝跡は他の溝跡と比較すると、蛇行の度合いが著しい。長軸方向が一致する遺構はない。時期は3号建物跡との重複関係から、中世と考えている。
(吉野)

10号溝跡 S D 10

遺構(図70)

10号溝跡は調査区中央部のB 9グリッドL IV d上面で検出した。4号溝跡、4号建物跡、小穴と重複する。新旧関係は4号溝跡では本溝跡が新しく、4号建物跡では不明、小穴では古いものや新しいものがある。本溝跡は南北方向に延びるが、一部欠損している。規模は現状で長さが2.7m、幅が0.37m、深さが0.12mである。壁は外傾し、底面は東側に傾斜している。堆積土は1層で、黒褐色砂質土が堆積しており、自然堆積土とみられる。

まとめ

10号溝跡は長軸方向が一致する遺構はない。時期は4号溝跡との重複関係から、中世と考えている。
(吉野)

22号溝跡 S D 22

遺構(図70、写真38)

22号溝跡は調査区西端部のA 15グリッドL IV a上面で検出した。本溝跡は南北方向に延び、その南端部を確認した。規模は現状で長さが1.3m、幅が0.78m、深さが0.12mである。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、自然堆積土とみられる。

まとめ

22号溝跡は周辺に長軸方向が一致する遺構はないため、性格は不明である。時期についても出土遺物がないため不明である。
(吉野)

11・14・16号溝跡 S D 11・14・16

遺構(図71、写真39)

11・14・16号溝跡は、調査区中央部のA 6、B 6～9グリッドにある。検出層位は11・16号溝跡がL IV c上面で、14号溝跡がL IV b上面である。5号住居跡、79・110号土坑、15・17・18号溝跡と重複し、新旧関係は5号住居跡、79・110号土坑、17・18号溝跡が古く、15・18号溝跡が新しい。

11号溝跡は南北方向に延び、両端部が欠損している。規模は現状で長さが10.7m、幅が1.2m、

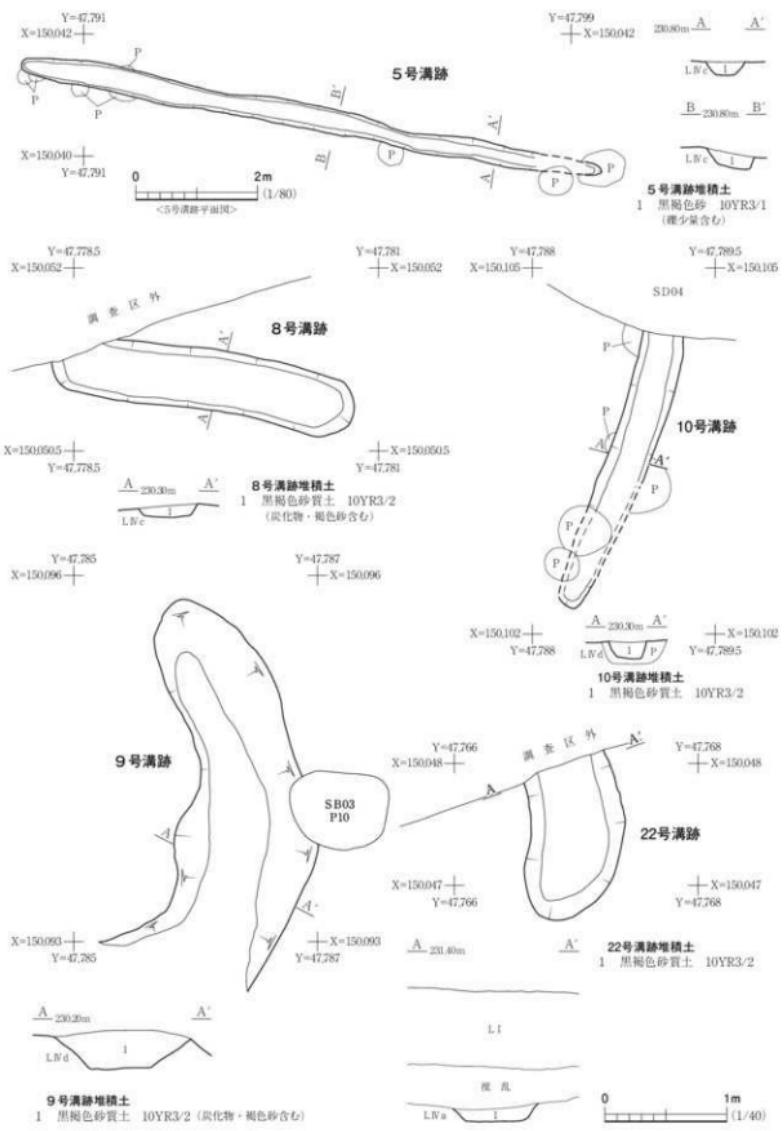


図70 5・8~10・22号溝跡

深さが0.34mである。壁は外傾し、底面は凹凸がみられる。堆積土は2層に区分した。 ℓ 1には炭化物・焼土を含むので人為堆積、 ℓ 2は自然堆積と考えている。

14号溝跡は北東隅を区画するように鉤の手状となり、南端部と西側が欠損している。規模は現状で長さが8.8m、幅が1m、深さが0.25mである。壁は西側では外傾し、東側では直立する。底面は皿状に窪む。堆積土は1層で、炭化物・焼土を含むことから人為堆積と考えている。

16号溝跡は南西隅を区画するように鉤の手状となり、北端部と中央部が欠損している。規模は現状で長さが21.8m、幅が2m、深さが0.28mである。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に区分した。 ℓ 1は炭化物・焼土を含むことから人為堆積、 ℓ 2は自然堆積と考えている。

遺 物(図71)

11号溝跡からは土師器46点、かわらけ7点、陶器10点、羽口1点、土壁157点が出土した。図71-1はかわらけで手づくね成形である。図71-2は陶器で、常滑焼のこね鉢である。

14号溝跡からは土師器52点、陶器1点が出土した。

16号溝跡からは土師器5点、かわらけ2点、陶器1点が出土した。図71-3は陶器で、常滑焼の壺もしくは壺である。

ま と め

11・14・16号溝跡は区画溝で、数回にわたり掘り込まれている。時期は出土遺物から中世と考えている。

(吉野)

17号溝跡 S D 17

遺 構(図71、写真39)

17号溝跡は、調査区中央部B 7グリッドL IV c上面で検出した。11号溝跡、82号土坑と重複し、新旧関係は11号溝跡、82号土坑が新しい。本溝跡は南部を弧状に区画し、西・東端部は82号土坑・搅乱により欠損している。

規模は現状で長さが6m、幅が1.9m、深さが0.15mである。壁は外傾し、底面は凹凸がみられる。堆積土は1層で、炭化物を含むことから人為堆積を考えている。

17号溝跡からは土師器22点、青磁1点が出土した。

ま と め

17号溝跡は南部を弧状に区画する溝跡で、時期は出土遺物から中世と考えている。

(吉野)

18号溝跡 S D 18

遺 構(図71、写真39)

18号溝跡は調査区中央部B 8グリッドL IV c上面で検出した。16号溝跡と重複し、新旧関係は本溝跡が古い。本溝跡は東西に延び、その東端部をのみを確認した。規模は現状で長さが6m、幅が1.9m、深さが0.15mである。壁は外傾し、底面は凹凸がみられる。

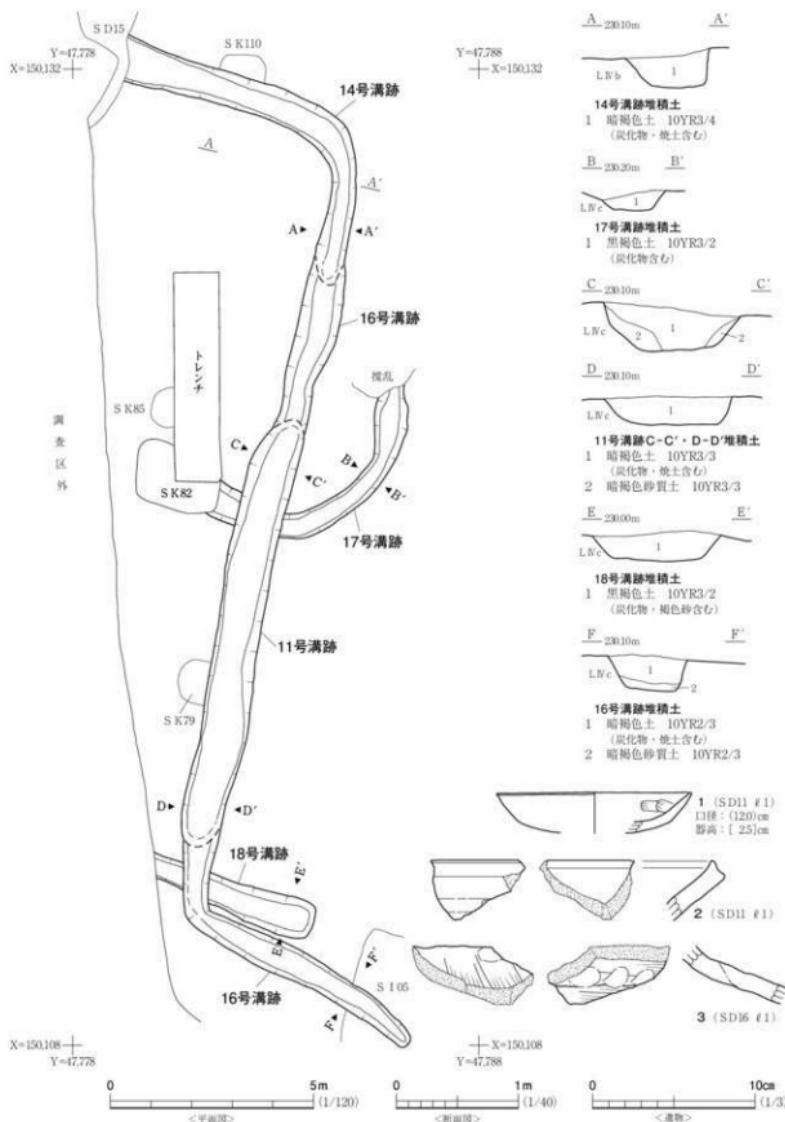


図71 11・14・16~18号溝跡、11・16号溝跡出土遺物

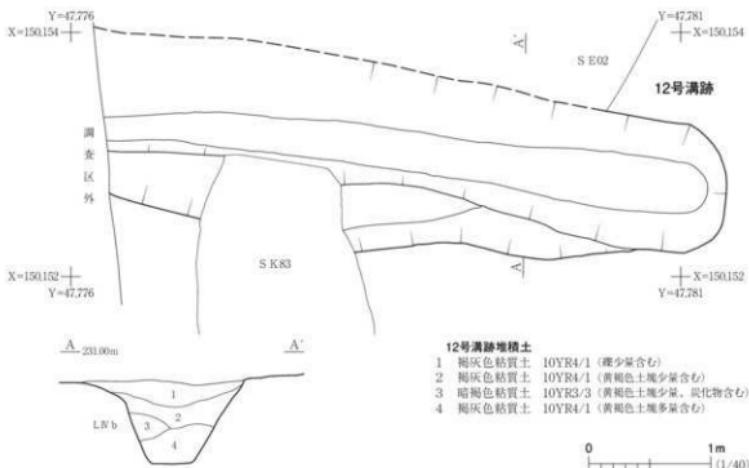


図72 12号溝跡

堆積土は1層で、炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。

18号溝跡からは土師器9点、かわらけ3点、陶器2点、土壁4点が出土した。

まとめ

18号溝跡は調査区外に延びる溝跡で、時期は出土遺物から中世と考えている。

(吉野)

12号溝跡 S D 12

遺構(図72、写真38)

本遺構は調査区南部のA・B 4グリッドに位置し、検出面はL IV a上面である。重複する遺構は83号土坑・2号井戸跡であり、83号土坑が新しく、2号井戸跡が古い。

溝は調査区西壁から東に向かって延びている。検出された範囲での全長は5m、最大幅1.15m、検出面からの深さは最大で0.7mほどである。溝の断面形は逆台形で、底面は東から西に向かって緩やかに下っている。

堆積土は4層に分層した。 ℓ 1は溝の上面を覆う褐色灰色粘質土で、砂や小礫が全体的に含まれていた。 ℓ 2は ℓ 1と同色の粘質土であるが、砂や礫を一切含まず、L IV a由来とみられる黄褐色土塊が含まれる。 ℓ 3は壁際にみられる暗褐色粘質土で、炭化物が少量含まれる。 ℓ 4は褐色灰色粘質土でL IV a由来の黄褐色土塊が多量に含まれている事から、人為的な埋土の可能性も考えらえる。

遺物は土師器43点、かわらけ1点、陶器1点が出土した。

まとめ

12号溝跡はその東端部を確認した。時期は出土遺物から中世と考えている。

(吉野・神林)

13・23号溝跡 S D 13・23

遺構(図73、写真40)

調査区の北部A～C 4グリッドに位置し、検出面はL IV a上面である。重複する遺構は2号井戸跡、15号溝跡で、本遺構が最も古い。

13・23号溝跡は調査区を東西に横断し、中央部が15号溝跡によって壊されており東西に分断されている。堆積土の様相や、溝の伸びる方向などから同時存在ではなく、掘り直してあることを確認した。新旧関係は23号溝跡が古く、13号溝跡が新しい。

13号溝跡は、23号溝跡の南端を掘り込んでつくられている。溝の全長は現状で7.3m、最大幅0.5m、検出面からの深さは最大で1mである。溝の断面形はU字状で、底面は西から東に向かって緩く下っている。堆積土は5層に区分した。 ℓ 1・2とも礫を含み。 ℓ 3・5にはL IV a由来とみられるにぶい黄褐色土塊が含まれ、 ℓ 4はL IV aと近似することから、人為堆積を考えている。

23号溝跡は13号溝跡の北側に位置している。全長は現状で11.5m、最大幅は1.2m以上、検出面からの深さは最大で0.8mである。堆積土は10層に分層した。堆積土に土塊・礫・炭化物が含まれていることから、人為堆積土と考えている。

遺物は13号溝跡では土師器41点、23号溝跡では土師器25点、陶器1点が出土した。

まとめ

13・23号溝跡は、23号溝跡が埋まつた後に13号溝跡を掘り込んでいる。出土遺物から中世を考えている。
(吉野・神林)

15号溝跡 S D 15

遺構(図74、写真41)

調査区北部のB・C 3・4、A・B 5・6グリッドに位置し、検出面はL IV a上面である。重複する遺構は13・14・23号溝跡であり、本遺構がもっとも新しい。

本遺構は、調査区を南西から北東にかけて横断する堀である。遺構検出時は判然としなかったが、南西側では2本の溝が並行して掘られている事が判明した。よって西側の大型溝をa号溝、東側の細溝をb号溝と呼称する。全長は検出された範囲で約29m、最大幅はa号溝で4.2m、b号溝で1.1mである。検出面からの深さは最大でa号溝1.2m、b号溝0.6mである。大型のa号溝は南西から北東にかけて緩く傾斜している。溝の断面形はa・bいずれも逆台形を基調に掘られていたと思われるが、上半部分は崩落などによってやや形状が崩れた部分が多い。

a号溝は20層に分層した。堆積状況から大別すると、 ℓ 1～17、 ℓ 18～20とすることが出来る。 ℓ 1～17は砂と粘質土が互層となって堆積していることから、自然堆積を考えている。 ℓ 18～21は、阿武隈川から流入した洪水砂と考えられることから、自然堆積としたい。

b号溝は5層に分層した。 ℓ 4上面で掘り上げが行われ、 ℓ 1～3が人為堆積で、 ℓ 4・5が自

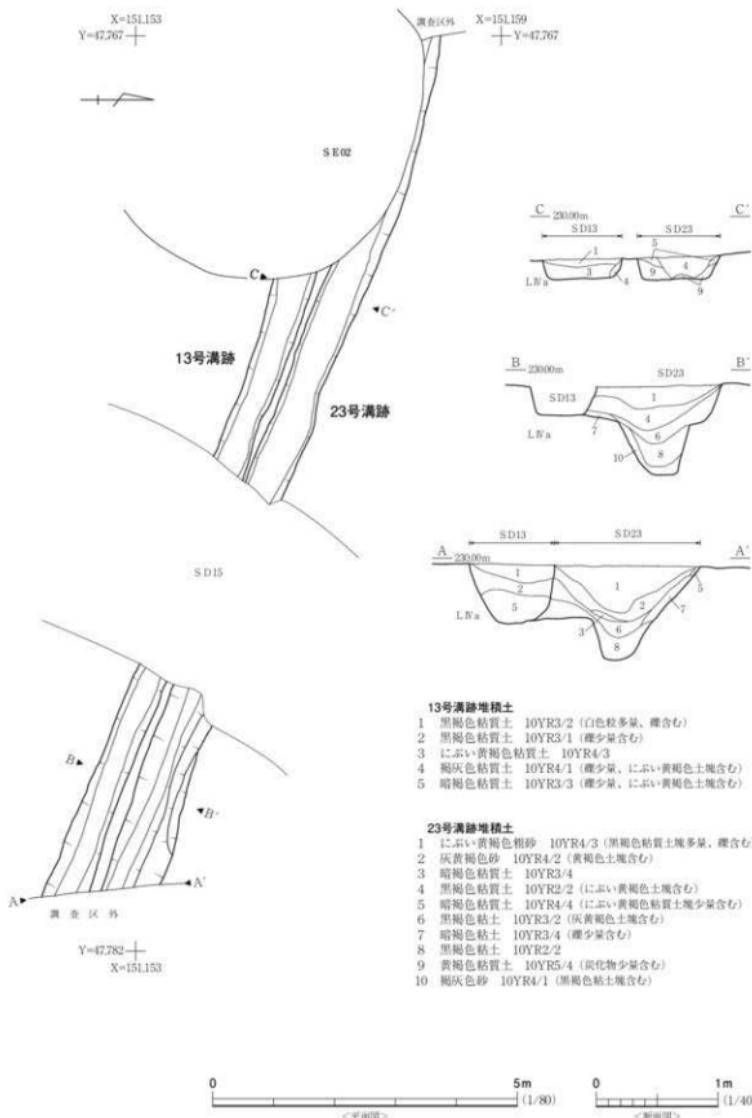


図73 13・23号溝跡

然堆積と考えている。

遺 物(図75、写真55)

遺物は土師器390点、かわらけ6点、陶器15点、須恵器7点、鉄製品7点、骨5点などが出土した。図75-1~5はかわらけである。1・3~5はロクロ成形で底部外面に回転糸切り痕が、1・5には板状圧痕もみられる。1は小皿である。2は手づくね成形によるものである。図75-6~11は陶器である。6~8は常滑焼の甕もしくは壺、9は瓷器系の在地産でこね鉢、10是在地産の甕もしくは壺である。11は産地不明の壺で、底部外面に回転糸切り痕が、胴部外面には鉄軸が施されている。

図75-12~15は須恵器である。12は鉢で、内面は吸炭による黒色化がみられる。13~15は甕で、13の外面には平行沈線文と櫛描き波状文が、14・15の外面には平行タタキ、内面には同心円状のアテ具痕がみられる。図75-16は手づくね土器である。

ま と め

15号溝跡は調査区で確認した溝跡のなかでも、最も規模の大きなものである。調査区で確認した中世の遺構を区画していた堀と考えている。

(吉野・神林)

19~21号溝跡 S D 19~21

遺 構(図76、写真42)

19~21号溝跡は調査区南部のB・C 5グリッドに位置し、検出面はL IV a上面である。検出時にそれぞれ番号を付して調査をおこなったが、3基の溝が一部重複しながら並行して延びることから、同一地点における溝の掘り直しであると考えられた。直接の切り合い関係にあるのは20・21号溝跡で、北側の21号溝跡が古く、南側の20号溝跡が新しい。

19号溝跡は、3条の溝の中でもっとも南側に位置している。溝は調査区東壁から南西方向に2.6mほど延び、そこではほぼ90°に折れ曲がり、北西方向に5mほど延びて立ち上がる。最大幅は0.4m、検出面からの深さは最大0.9mほどある。溝の断面形は逆台形やU字状となっている。

堆積土は単層で、L IV a由来の小土塊を含むことから、人為堆積を考えている。

20号溝跡は2条の溝に挟まれて位置する。19号溝跡と同じく調査区東壁から南西方向に2.5mほど延び、そこではほぼ90°に折れ曲がり、北西方向に4.7m延びて立ち上がる。最大幅は1m、検出面からの深さは最大0.5mほどである。溝の断面形は逆台形を基調としているが南東辺付近ではV字状になる部分もある。

堆積土は8層に分層した。 ℓ 1・2は溝上面を覆う層である。 ℓ 3~5は中層に堆積する。 ℓ 6は部分的に多くの砂が集積していた。 ℓ 8は底面を覆う褐灰色砂である。B-B' ℓ 7の上面をみると、溝の掘り上げが行われていた可能性が高い。各層の堆積状況から ℓ 1~6は人為堆積、 ℓ 7・8は自然堆積と考えている。

21号溝跡は最も北側に位置している。調査区東壁から北西方向に0.4mほど延びそこではほぼ90°

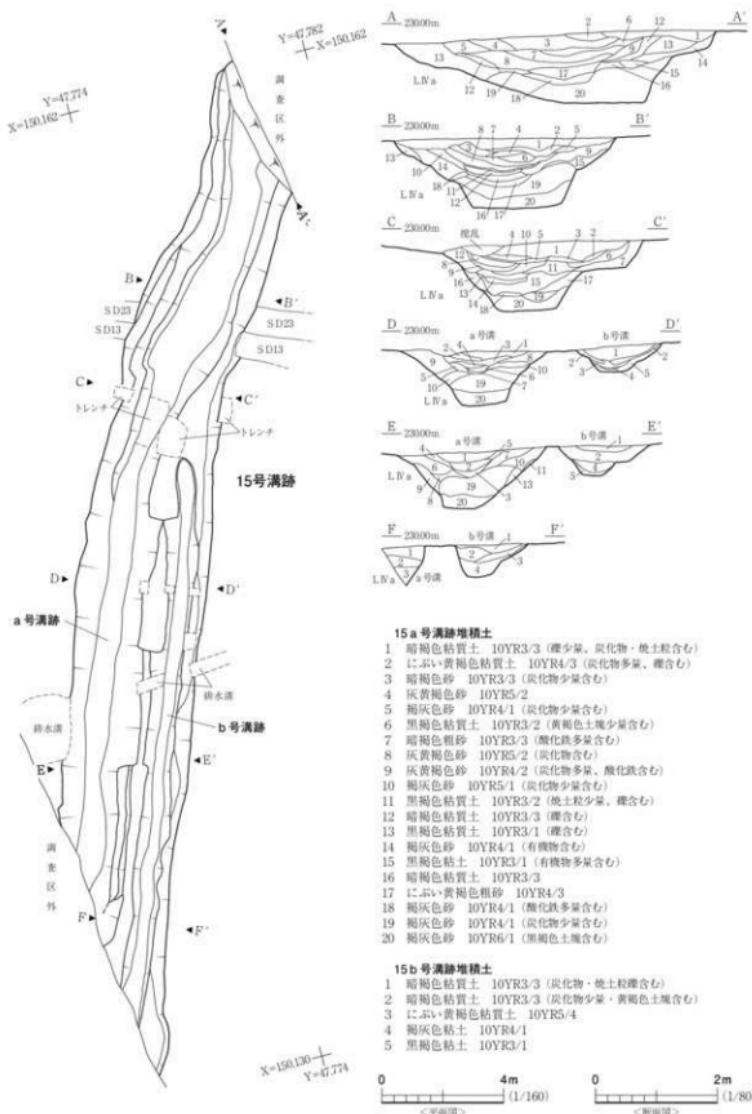


図74 15号溝跡

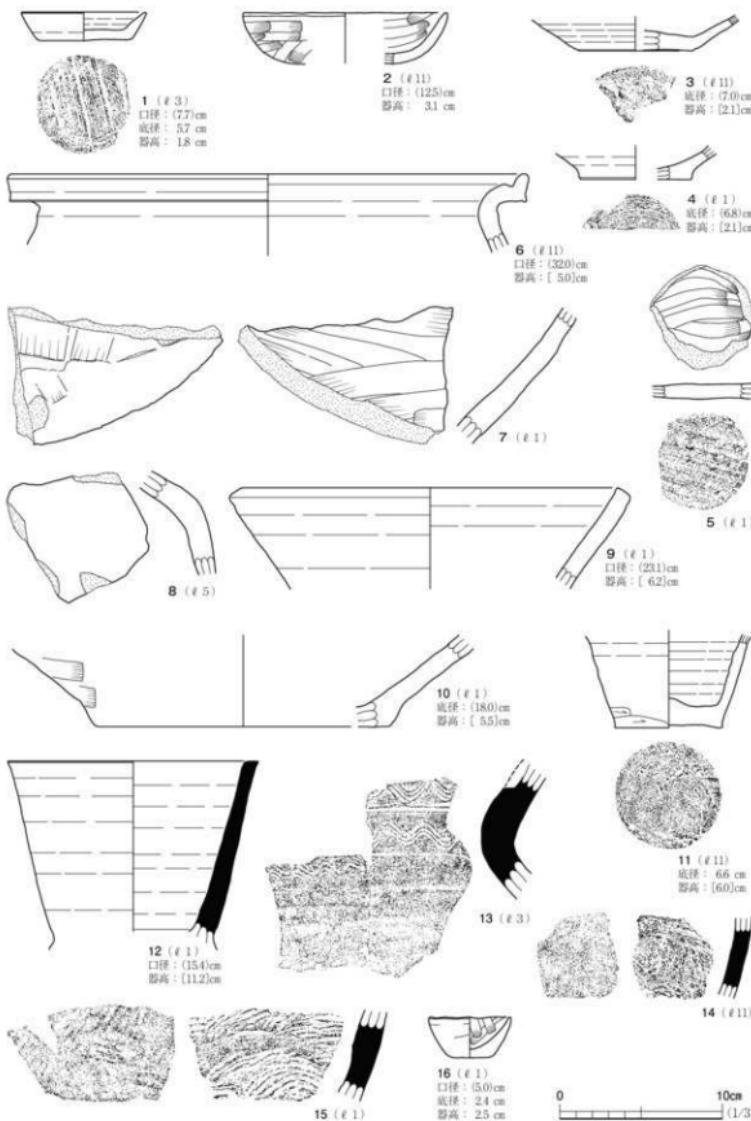


図75 15号溝跡出土遺物